

第50号

# 学体連会報

平成 25 年度



公益財団法人 日本学校体育研究連合会  
(<http://www.gakutairen.jp>)

## 生きる力の育成は“足育”から

### 児童生徒、足トラブルの実態

小学生 36%・中学生 57%・高校生 74% は  
足トラブルの経験がある。



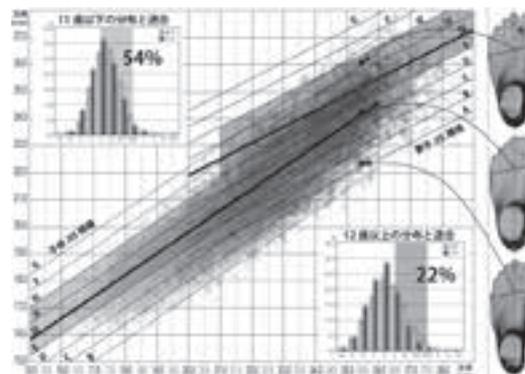
児童生徒 10,000 人の足計測の結果、子どもの足トラブルが、  
足専門医の予想より、**10 倍も多い**ことがわかりました。  
また、親世代に比べ、足は長細くなっており、  
子ども達の足アーチが低下していると考えられます。



### シューズが足に合っていない

小学生 46%・中学生 81%・高校生 73% は  
足に合う学校シューズを選べなかった。

足に合わないシューズは、足トラブルの原因になりますが、  
学校シューズは、児童生徒の 60% に適合していません。  
さらに、70% が大きいサイズを履いているので、  
足に合ったシューズを履いているのは 10% 程なのです。  
これは、**体力・運動能力低下の一因**であると思われます。



### 足元からの健康教育“足育”を

“足育”は、足を知り、足に合った靴を選び、  
正しく履いて十分な運動をすることから。



足計測データに基づいた、学校シューズの研究開発をはじめ  
足育研修会や、足計測の普及など“足育”を進めています。



# 「新たな学体連を目指して」

会長 本村 清人



財団法人として昭和三十年改組・名称変更した歴史ある日本学校体育研究連合会（前身は昭和二十二年結成の日本体育指導者連盟）は、本年の四月をもって、新たな「公益財団法人」として出発をいたしました。このことから、公益目的事業、中でも学校体育の発展に資する事業（①全国学校体育研究大会の開催・支援事業、②指導資料作成・配布事業、③指導者講習会の開催事業、④全国学校体育研究最優秀校・優良校・功労者表彰の表彰事業、⑤広報事業）をさらに円滑かつ効果的に進めていくことが

期待されております。

そのような中、公益財団法人日本学校体育研究連合会初代会長（定款上は代表理事）である高橋健夫先生が、去る本年七月十六日、志半ばで逝去されました。極めて残念ではありますが、その志をしっかりと引き継ぎ、確実な歩みをしていかなければなりません。残された任期を不肖私が勤めることになりましたが、評議員会及び執行機関である理事会で十分審議を尽くし、文部科学省はもとより各都道府県を総括代表とする学校体育研究団体等との連携協力を深めるとともに、賛助会員のご支援をいただきながら、充実発展を期してまいります。

今や体育・保健体育は、すべての児童生徒に「生き

る力」を育むにはもったもふさわしい教科です。その三つの要素、すなわち、①「確かな学力」（知識・技能、思考力・判断力・表現力など、主体的に学ぶ態度あるいは自から学ぶ意欲）、②「豊かな心」、③「健康やかな体」は、毎時の体育の授業での小さな成功感、達成感から生じます。そして積み上げて得られた自己有能感が「生きる力」を確かなものにすると考えます。

今回の会報では、両国国技館等を会場として行われます第五十二回全国学校体育研究大会東京大会の全体会及び分科会の内容・見どころ等を座談会も含めて紹介しております。多くの方々のご参加と積極的な研究協議で大会を盛り上げていただきたいと思います。

## 目次

- ・ 会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ・ 座談会、全国学校体育研究大会近年度開催地・・・2
- ・ 第51回全国学校体育研究大会北海道大会を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- ・ 第52回全国学校体育研究大会東京大会開催にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- ・ 東京大会分科会の見どころ・・・・・・・・・・・・ 21
- ・ 全国学校体育実技指導者講習会について・・ 24
- ・ 「足育」（あしいく）の推進について・・・・・・27
- ・ 足育 学級指導について・・・・・・・・・・・・29
- ・ 平成24年度賛助会員（個人）一覧・・・・・・33
- ・ 平成25年度賛助会員（団体）一覧・・・・・・34

## 表紙にある学体連ロゴマークについて

上部の円は幼児を、それを受ける形で3つの弧が描かれている。小さな弧から順次、小学生、中学生、高校生を表示している。幼児・児童・青年がしっかりと大地に足を踏みざり、両腕を高くかかげて、生き生きと運動している姿をイメージすることができる。子どものありべきシエマを発展的系統的に象徴している『学校教育のシンボリズム』ないしシンボシエマ。図柄は紫紺の地に白抜きである。（会報第28号浅田隆夫理事長（当時の役職））

〒151-0052 東京都渋谷区神園町3番1号 国立  
オリンピック記念青少年総合センター内  
公益財団法人日本学校体育研究連合会  
電話 03-3465-3954 F A X 03-3465-7464  
発行者：本村 清人  
発行日：平成25年10月24日  
mail: gakutairen@msb.biglobe.ne.jp

# 座談会

この座談会は、全国大会シンポジウムの  
予告編です。全国大会にお越しの方は、是非、  
事前にお読み下さい。

## 『座談会の趣旨説明』

学体連理事・菅原健次先生  
学体連会報を担当してい  
ます菅原と申します。よろ  
しくお願いいたします。こ  
の座談会が本年度の全国大  
会東京大会の“予告編”と  
なることを期待して企画し  
ました。どんなシンポジウ  
ムになるか、前もって分  
かっていれば、“こんなこと  
を訊いてみたいな”など考  
えをもってシンポジウム  
に望めると思い、集まっ  
ていただきました。実際には  
白旗和也先生が会場で司会  
なさるので、本日のことに  
ついては、白旗先生に話し  
を進めていただきます。で  
きれば私は観客のつもりで  
先生方の話を伺います。何

か感じたことを途中で質問  
させていただければと思  
います。それでは白旗先生、  
よろしくお願いいたします。

司会（白旗和也先生）

皆さん熱くお忙しいと  
ころ集まっていたいただきあり  
がとうございます。最初に  
自己紹介したいと思います。  
この四月より日本体育大  
学に異動しました白旗です。  
この座談会には、教科調査  
官の時から毎年、参加して  
おります。よろしくお願  
いします。

後藤晃伸先生

みなさんこんにちは。後  
藤晃伸と申します。愛知県  
立一宮高等学校定時制にこ

の四月から勤務しています。  
昨年までは愛知県立西春高  
等学校でお世話になりました。  
た。その前任校で、平成二  
十年から二十二年まで国研  
の研究指定校事業を頂き、  
勉強させてもらいました。

また、そのかねあいで、体  
づくり運動の学校体育実技  
指導資料集やリーフレット  
などの作成にも携わらせて  
いただきました。初めてで  
緊張していますが、よろし  
くお願いいたします。

田村新一先生

秋田県からきました大館  
市立東中学校の田村新一で  
す。平成二十三年度・二十  
四年度の研究指定を受けま  
して、勉強させていただき  
ました。二年間体育分野で  
は、主にダンスと柔道につ  
いて、保健分野については  
傷害の防止を中心に取り組  
みました。昨年は、秋田県

の全県授業研究大会の中で  
研究指定を受けた学校とし  
ての成果を公開することが  
できました。今日は色々と  
勉強させていただければと  
思います。よろしくお願  
いいたします。

関口亮治先生

よろしくお願いたしま  
す。関口亮治と申します。  
東京都足立区立新田小学校  
に勤めています。小中一貫  
教育校ということで、今小  
学校・中学校施設一体の学  
校で勤務しています。学校  
内では一年生から九年生と  
いう学年の構成で、ちよう  
ど今地区的には人口が増え  
ている地区で、一〇〇〇人  
を超えている大規模校にな  
っています。東京都小学校  
体育研究会というところで  
研究させていただいて、ポ  
ール運動を中心にこれまで  
研究しています。よろしく

お願いいたします。

内田匡輔先生

内田匡輔と申します。東  
海大学で教員をしています  
が、東海大学にきて8年目  
が終わったところです。前  
任は東京にあります、筑波  
大学附属中学校で教員をし  
ていました。その前は、筑  
波大学附属豊学校、聴覚特  
別支援学校で教員をしてお  
りまして、専門は、特殊体  
育、障害のある子供たちの  
体育やスポーツを中心に研  
究しながら実践をしていま  
す。また現在は、大学の近  
辺に住んでいる発達障害の  
子供たちに体操教室をひら  
き、発育発達の側面から障  
害のある子供たちの教育環  
境を支援しながら、学校を  
外側、内側から支援するとい  
う活動を行っています。今  
日はよろしくお願いたし  
ます。

日時：平成二十五年七月二十七日（土）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター内 学体連事務局



東京都足立区立新田  
小学校 主幹教諭  
関口 亮治先生



神奈川県秦野市立  
本町幼稚園 副園長  
山口 由美子先生



日本体育大学  
教授  
白旗 和也先生



東京福祉大学教授  
学体連理事（司会）  
菅原 健次先生



東海大学体育学部  
体育学科 准教授  
内田 匡輔先生



愛知県立一宮高等  
学校 教諭  
後藤 晃伸先生



秋田県大館市立東  
中学校 教諭  
田村新一先生

山口由美子先生

こんにちは、神奈川県秦野市から来ました市立本町幼稚園の山口由美子です。十八年間、幼稚園教諭をし、その後、二年間幼小の人事交流者として小学校に勤務しました。そして五年間指導主事をしました。今年の四月から現場に戻りました。よろしくお願いいたします。指導主事をしているときに「幼児期運動指針ガイドブック」の作成に携わらせていただき、「幼児期の体力向上について」勉強させていただきました。

幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものと言われています。幼児期の教育は、小学校以降の教育につながり、また家庭の教育とも連携していくことが重要とされています。幼稚園での教育が、どうつながるのか、どうつながっていくのかということが私の課題の一つとなっています。現場に戻れたので、一つずつ丁寧に取り組みたいと思います。今日は、異校種の方々とお話をするので楽しみにして来ました。

よろしくお願いいたします。

司会（白旗和也先生）  
今日は、テーマに基づいて座談会をするには最強メンバーが集まってもらいました。

特に今年度からは、幼児期の関係者にも入ってもらいました。これまで、幼稚園も保育を公開していたにもかかわらず、シンポジウムになると幼児期関係者が入っていませんでした。幼児期運動指針もできたので、メンバーに入れてもらいました。これからはさらにこれまでに以上に幼児期が注目されていくのではないかと思います。

それではさっそく本題のほうに入っていきたいと思えます。  
シンポジウムのテーマが「健やかな体の育成をめざして」です。心と体は一体としてあるわけですから、特に体、そして体力ということが中心ですが、からだというのを広く、健やかな体ととらえて取り上げていきたいと思っています。これまで子供の体力の低下

傾向が依然深刻であり、運動する子どもとそうでない子どもの二極化であると、いわれてきています。それ以上に小学校などでは運動しない子の増加で、する子の減少、といったほうがいかもしれませんね。二極化というよりはしない方向にみんながシフトしてきていて、している子はいるんですけど、そうとう人数は減ってきている。ふたこぶのグラフにはならず右肩下がり。そんな図式になっています。

現行の学習指導要領では、このような課題を踏まえて体育・保健体育の授業時数が増加されています。教科によっては時数が減少している教科もありますので、そういう中で体育は生きる力の育成として期待されている、という面があるので、はないかと思えます。それから平成二十年度から全国体力・運動能力、運動習慣等調査が実施されました。一時期抽出でしたが、今年度からまた悉皆にもどりまし。このあたりも国としても子供の体・体

力の問題を非常に大きくとらえているという証拠だと思っています。さらには平成二十四年三月に幼児期運動指針を策定しました。学校体育をいっそう充実していこうと考えていくと幼児期をもっともっとクローズアップしなければならぬ、と考えています。また同じく二十四年三月には、スポーツ基本法に基づいた基本計画ができましたが、この中で、子供のスポーツ機会の充実・保障ということが柱としてあがっております。その中の一番の施策として、「幼児期からの体力向上」があり、二番目に「学校体育の充実」となっています。国民みんなの体・体力ということを考えていくと、幼児期も含め、国民みんなが通る場である学校教育における役割の重要性を再認識しています。

今話しましたように、子供の体力、健康・体というのは非常に注目されています。非常に重要な視点ではありますけれども、ここに集ま

っておられる方は、自分の心配もしなくてはならない年齢にさしかかっているわけです。それで、まず自分の最近の健やかな体というのはどうなのか語っていたきたいと思えます。

ちなみに私は日本大にきて一番悩んでいるのは、文部科学省時代よりも運動不足になっていくことです。健康な生活リズム、運動のある生活を作り上げないとまずなと思っております。それは関口さんからどうでしょう。

関口亮治先生

ライフステージという生活がだいぶ変化してきているかなと思います。昔はサッカーをやっていたんですけれど、そのサッカーをやるために、楽しむために体を鍛えていました。最近子供が生まれて、子供が小さいものですから、子供中心の生活なものですから、子供と一緒に公園にいったり、夏になるとプールにいったりして、そんなところで自分の活動量とか運動量を増やしています。健康と

いう点ではそういうことで少し寄与しているのかな、と感じています。

司会（白旗和也先生）

さすが、一人二分ということ。本番も時間を守ってもらわないと、まとめる時間がなくなってしまうので、時間をぜひ気にして話してください。いまのは1分です、すばらしい。

田村新一先生

まずは早寝・早起き・朝ごはんです。青少年センターの入り口にも偶然看板を見付けたんですけど、秋田県で県として推進しているキーワードの一つです。自分もそれを率先して実践しているというよりは、自然にそういうかたちになっているところ。さきほど関口先生もおっしゃったように自分も子供が小さいもので、九時から九時三十分には寝せなきゃいけないので、帰りも遅いのですけれど九時ころをめぐりに寝ることになります。結果的に早寝になってしまい、そうすると仕事が終わった後追いつかないので、朝早く起きてやらなければいけないので、結果的に早起きになり、お腹が空いて朝ご飯をしっかりと食べるというパターンになります。

内田匡輔先生

私も学生時代ラグビーやっておりました、体格はこの身長で体重が九十kgぐらいいだつたんです。実は仕事に入ってから、体重が一時期、一一〇kg超まで増えたんですね。今、一〇〇kgをきるかというところまでさがってきています。色々家内が努力してくれていて、家で食べているものに対して工夫の必要性を感じています。最近、「発達障害の子供が変わる食卓」という本を読んでも、今の子供たちの食べているものが、油や砂糖が中心となっていて、我が家の子供もずいぶん「体がかゆい」とかアレルギーの様な症状が出ていました。そこで食卓は野菜を中心に、油も工夫する等果があらわれて、ちよつとずつ体重が減り、面白いなと思っております。

後藤晃伸先生

学生時代にアメリカンフットボールをやっていました、それを終えた後はパタツと運動やらなくなりましたね。ただ、こうやって教える側にまわり、いろんなことを知るうちに、日常生活でも少しずつ気を付けることが多くなったかなと思

います。例えば、厚労省から出ているアクティブガイドのMETSの指標なんかは、自分の中でも少し気にすることが多くて、ちよつと駅まで歩こうかなとか、少し階段を使おうかなとか、運動というよりは生活運動というんですかね。そういうところでの活動量は増したかなと思います。

日常の運動量が多くはありませんが、大学で学生と遊んでいます。このところインディアカを行う事が多くなっています。学生も、自分も知らないスポーツを

行う事で、これまでのスポーツとはちがう価値観を学生と一緒に探しながら、研究のかたわら楽しんでいきます。食生活、それとニュースポーツをベースにしたアダプテッド・スポーツをとりいれながら健やかな体を育成したいと思っています。

十一月の本番のシンポジウムで一〇〇kgを切っていたら報告します。

山口由美子先生  
学生時代は、部活に入っ

て体を動かしていました。就職すると運動する時間が減ってきました。そして、出産して子育て期に入るとさらに運動をする時間が取れなくなりました。それでも今は以前より運動量は少し増えたかなと思っています。先日、小学校のプールを借りて三時間ほど子どもたちと一緒に水遊びをしました。四、五歳児クラスが十五分ごとに順番に入れ替わり有意義に過ごせました。しかし、その日は、疲れてぐったりでした。かなり体力が落ちたなと実感しました。自分から「毎日、運動

をする」という意識を持っていないと、今の年齢だと動かなくてすめば動かないままま過ごしてしまうのかなと思ってしまうのかもしれない。そこで、フィットネスに通い、家では時間のあるときにストレッチ体操をしています。それとあとは健康な体をつくるには、内田先生が言われたように食事が関係してくるだろうと、思いまして、食べ物についても少しお肉からお魚、野菜を多めにと気をつけながら生活しています。

司会（白旗和也先生）

ありがとうございます。自分のからだは自分で守らなければならぬということとです。日体大の学生をみても、競技をやっている間はものすごくやっているのですが、その機会を失うとまったく何もしなくなってしまう。自分のからだ心が配になるまでほとんど運動しない。意外とこれは日本人の一般的な状況ではないでしょうか。これでは、なかなか豊かなスポーツライフにつながっていきませんか。

ね。  
それでは子供のほうに目を向けていきます。テーマである健やかな体、ということ考えたときに、どのようなことを現状として感じられていますか。



山口由美子先生

今の子どもたちの生活は、夜型傾向になってきているように感じています。何年前から「早寝・早起き・朝ごはん」という動きがあり、朝ごはんを摂取する子どもが増えてきているようですが、その食事の内容がどうなのか？ある程度決まった時間に三食食べているのか？誰と食べているのか？などが気になっています。

また、お父さんの帰宅が遅かったり、共働きだったり、子どもたちは、大人の生活リズムに合わせるような生活になり、「子どもの時間」(子どものペースで過ごしたり、時間を気にせず思いっきり遊んだりする時間)が少なくなっていることです。寝る時間が遅くなる、そうなる幼稚園に行く時間、間に起きられなくなってしまう、悪循環がおこってしまいます。体が起きていない状態で幼稚園に来る、遊びだす、指導者が予想しないところで怪我をしたり、些細なことで怒り出したり、友達とトラブルになったりとそのようなことがあるな、と感じています。

幼稚園で身体を使って遊ぶ時間が長く、降園後は、外で遊んでいる時間は短いと思われています。地域のつながりが希薄であったり、大人が見ていないと危険なことが起こったりして安心して遊べる遊び場が少なくなっているようです。また、近くに友達がいないことや遊ぶ時間帯が合わないなどの現状があつて、家の中で過ごすことが多いようです。限られた時間や空間の中で遊んでいます。なので、限られた動きの遊びをしていくわけです。私たちがの子ども時代には比べると遊びに多様性がないのかと感じています。指導者である教師が意図的にいろいろな遊びを経験できるように工夫していく必要があると思われています。そうでないと子どもたちは、いろいろな遊びを通して友達と一緒に体を動かすことの楽しさやできなかったことができたり喜びの経験が少なくなってしまうのではないのでしょうか。

司会（白旗和也先生）  
遊びについてはどうですか？ こどもの遊びで？

山口由美子先生



んは食べて当たり前だよ」という雰囲気にながら、生活させていくべきだろうと思っています。

次に運動についてです。中学校には運動部活動というのがあるんですけど、運動する機会自体が減ってきているという現状を考え、たわけではないのですが、本校では全員部活動に加入するという流れになっていまして、全員が何らかの部活動に加入しております。

ただ全員が運動部に入っているかという点、そういうわけではなく文化部に加入している生徒も勿論います。現段階で七十三%が運動部活動に所属しています。残りの約三割ですが、吹奏楽部の生徒たちがその半数をしめています。結果的には、やはり女子生徒の運動する機会の減少、運動しない傾向が気になる状況になってきているように感じます。



司会（白旗和也先生）  
生活習慣の面では？

田村新一先生

登校に関しては、車で送ってきてもらわないようにかなり言っていますね。自転車による通学が多く、徒歩の生徒もいますが、特に朝は、自分で登校するように話しています。

菅原健次先生

秋田では、公園の使い方などどうなっていますか。

田村新一先生

そうですね小学生も中学生も、公園で遊ぶというよりは、自分の学校の校庭や野球場、テニスコートなど

を活用しているようです。部活動のない日や練習が終わった土曜日・日曜日などは、サッカーをやったり、野球をしたり、テニスをしたりしています。比較的環境があればそこに集まるものだなと思っています。

田村新一先生

昼休みは、体育館と卓球場を開放しています。そうすると体育館には、多いときには五十人くらいは来て遊んでいます。安全面を考えて、約束やルールを決めたり、私自身も毎回体育館についていたりしているんですが、かなりの人数がきて汗をかきながら運動しています。やはり男子生徒が中心で、女子生徒は少ないです。

女子生徒への運動機会と場所の確保ができれば運動する人数も多くなるのかなと思っていますが・・・

菅原健次先生

それでは、投げる力は、どうなっていますか。

田村新一先生

まあ、遠くに投げるとい

う動作は日常的に行う機会がそもそも少なく、体育館で行うスポーツでも、バスケットのように近くに正確にパスするということはあっても、野球のように遠くになげる機会というのはかなり限られていますよね。ハンドボール投げの記録を見ても、女の子にとっては難しいものが確かにありますね。

後藤晃伸先生

先ほどの話からすると、車での送り迎えはすごく頻繁ですね。雨が降ったりなにかすると、すごく多いし、ちよっと遅刻しそうなると、親に送ってもらおうとか。そういう意味では、日常生活での運動の機会が減ってきているのかなと思います。

今は定時制で、夜間なんですけど、先ほどからキーワードとなっている早寝・早起き・朝ごはん、なかなか難しいですね。いろいろな目的で定時制を選んでいるとは思いますが、その中でも日中は仕事をし、夜間で学習して、というモチ

ベーションで入ってきている生徒は、早寝・早起き・朝ごはんというのは比較的できていないと思いますが、そうではなくて入学してくる生徒、特に1年生は、入学してから日が経つにつれて、がらっと生活習慣が崩れてしまう。生活が不規則になればなるほど親との関係性もだんだん失われてしまう。親の生活の時間帯と子どもの生活時間帯がずれていって、そういって夜遊びが多くなってしまっていること、乱れてしまっている生徒がよく目立ちます。まさに悪循環。それをこの間の保護者会の中でも注意を呼びかけたんですが、そこらへんの管理が難しい。運動面でも考えてみますと、前任校でもそうだったんですが、有能感がないというか、運動嫌いの子や、運動が苦手な子は特にですね。何をやらせたらうまくできるのかというイメージがなかなかなくて、ただ力まかせに運動する、要するに身体的に有利な者が勝つという感じ。授業風景を観ていて

もよくこの中で運動の苦手な子も一緒にやっているなど。できる子が一人でボールを持って、ワーとやっている、ただその中でボーと立っている子がいるという感じ。そういう状況で楽しいのかなど。もちろん運動の苦手な子でも一生懸命汗だくになって走り回っている子もいますけど、少しづつそういったところを改善していけないといけないなど感じていきます。

司会（白旗和也先生）  
前の西春高校と比較してどうですか？

後藤晃伸先生  
体を動かすことが好きという点では、特に前任校と現任校ではそう大きな違いがあるわけではないと思います。ただ、好き嫌いは激しいですね。

司会（白旗和也先生）  
特に女の子についてなかなか高校ではむずかしいと思いますか？

後藤晃伸先生

授業場面でも、勝手に

て言ったらおかしいですが、自分たちで発展していくわけではないので、工夫できるような仕掛けは大切ですね。これは男子でも言えることですけど。ただ、運動面以外でケアしなければいけないことが多いとは思いますが。また、一部の生徒に生活の様子を聞くと、家から出たくない、動きたくないので家にいるという休みの過ごし方。運動しているも面白くない。体動かすのが面倒くさい。本校の生徒は、よく面倒くさいという言葉を使いますね。運動だけでなく、何に対してもですけどね。

菅原健次先生  
面倒くさいということは意欲がないということですか？

後藤晃伸先生  
そうだと思います。

菅原健次先生

そのことは、先ほどの有感ともつながっていますか

後藤晃伸先生

そうですね。関係していると思います。そういった点で考えると、前任校の方が有能感はやさしいような感じもします。いわゆる進学校の生徒の方が、スイッチが入りやすく、長続きしているような気がします。

司会（白旗和也先生）  
最後に大学のほうから。  
内田匡輔先生

大学の教員になる前は中学校の教員でした。教える側、生徒を育てる側だったわけですが、私が教え子たちは、その後、どう育ち、大学に行き、スポーツライフを送るのか、学生を見ながら楽しみにしていました。ですが、大学での体力テストや、学生が体育スポーツに携わる姿をみて、なかなか難しい現実があると率直に思います。

特に東海大学は四年前から体育実技を、必修に戻したんです。必修に戻したところ、体育と聞いただけで震えてくる、嫌な思いを抱く学生が多く見られるよう

になりました。体育やスポーツが恐ろしいものと考えている大学生がいることに驚きました。

高校までの体育では、先生に「調子悪い」、「面倒くさい」というと、「いいよ見学していて」といわれたという。そんな学生達が大学の体育では、「必修」と言われ、震えながら「なんでやらなければならぬんですか」と涙ぐんで話している。そういう学生がいるという現状があります。こういう現実と向き合い、自分が育ててきた子供たちをどのようにに社会に送り出しているのかという最終局面をみているんだな、と感じています。

大学が体育を必修に戻したという理由の一つには、学生のコミュニケーションの希薄さや、これから社会に出て行く上で、健やかな体がいかに大切なのかというのをもう一度考えなければならぬというベースがあります。中でも、必修化するにあたり、大学で教科書もつくりました。その教科書内には、大学生の健

康というページもあります。一人暮らしでは、生活習慣が崩れがちになります。自分で生活をコントロールする事は、なかなかできない、そういうところを実は小中高と重ねてくる中で、健康がいかに自分にとって重要かとかそういった理解がなかなかなされてこないという背景が強くあると思います。自宅から離れ、自分で時間のコントロールができることは楽しい事がたくさん見つかる瞬間でもありません。だからこそ健康の価値に理解が届くかは大きな課題です。

また、自宅から通える学生はどうかというと、両親の手が入った大学生が多いです。例えば、入学式卒業式に必ず出席することは、まだあるかなと思います。授業を休むとき親から連絡が入る事もあります。夏には全都道府県をまわって、大学も保護者会を開き成績を渡しながら面接を行います。こういったことが他大学でも定例化している実際があると思います。良い面、悪い面あるでしょう

うが、大学は、いろんな形で、健やかな体育成に向けて機会を設定していると思えます。

例えば東海大学では、小中高の昼休みのようにいわゆるラグビー場やサッカー場、総合体育館の開放を行って、普段、体育会の運動部活動の競技でしか使っていないようなところで遊ぶ機会を提供します。そうすると、嬉々としてフライングディスクしたりとか、またバドミントンしたりして

います。なので、機会や場所の設定をしていくと、いろんなことをやりたいという学生はいるのだな、こういったことができるベースには、小、中、高校で自分がやってみたいというスポーツを持ち越しているのだろうと思うのです。

自分が教壇に立つと教え方がりで、できたこと、上手くなつて事ばかりみてしまいがちです。学生が今、どんなことを持ち越しているのかを大学でみてみると、やらされて伸びたことよりも本当に自分がやりたいことだけがそこに残っている。

ずっとキャッチボールしている姿とか、ダンスに熱中して友達と動いているとか。熱中してはまって動いている姿を大学でみると、そこに小中高の体育がどのよう

に携わって来たのかと想像します。

教員養成に関わって学生に聞くと、教壇に立つにあたり、学生は「野球ができるようになってほしい」、「サッカーができるようになってほしい」、「うまくなつてほしい」、「技能を高めたい」と言うのです。分かりますが、「じゃあ君はバスケットボールで何を教えたの」とか、「サッカーで何を教えたの」とか、「先生シュートを聞くと、「先生シュートをいれれば楽しいじゃないですか」という話で終始する。体育系大学に進学し、その

競技の指導者、そして教員を目指す学生は、競技志向が抜けません。体育スポーツで、「できる」とか「成功した」という経験の豊富な人間が集まってきているので、できる人たちが考えている「健やかな体」は、できる人たちをベースに考

ているのではないのかなと思えます。

できない人やうまくいかない人、障害のある人と関わる中で、いかにうまくいかなないという人たちに時間をかけると、できるように

なるのか、楽しめるようになるのか、といった視点が必要で、つきあえるだけの大人の低さとかやさしさとか、例えば、参加しにくい生徒と話す、子供ができなかったら話を聞く、それをするだけでも子供はやりたいとか、いっしょにやろうという気になる。大学生でこういった事のできる学生は、特に競技を教えていきたいと思っ

ている学生には、なかなか難しい面があると思えます。この現状をどうとらえるかといったときに、できるもの（成功体験のある人）が、できるもの（成功体験する事だけ）を考

えていくと、抜けも評価されにくい子どもや生徒が出てくると感じます。



司会（白旗和也先生）

幼児期は課題が見えにくいですね。これがだんだん蓄積していつて最後の大学になり、大きな課題になっています。突然今の学生になつたわけではないので、早い段階から適切な手を打つと必ず効果があることでしよう。どうしても運動してきた子たちイコール部活でがんばってきた子たちという傾向が強い。では、授業を通して、運動することをもっと身近にしていけるかが問われます。体育科教育実践法という授業づくりのための授業をしています。が、指導案を書くとはじめは部活動の練習になつてしまふんです。まずはうま

くないんだからうまくなるまで練習しよう。

でも、その練習自体がいやになる生徒が結構います。わたしでもできそうだなということを提供してあげれば、人間はそもそも動くことは本当に嫌いではないから、自分が自信をもって、嗜好にあったことをやれば、意識は変わってくるでしょう。その運動の一番楽しいところをたつぷり味わえるようにしていく発想が必要

かなと思います。そのように生徒の意識を変えられるかどうかプロとしての境目だよと話しながら、アイデアを提供していくと、だんだん授業が変わってくるんですよね。そのよかつたところを実際に学生も生徒になりながら体験していくと授業が上手になっていき、視点が変わってきました。

これから話してもらおうのは、それぞれの校種の中で、押さえておく必要のあるものはいったい何なのかということです。

田村新一先生  
体力に関しては、データ

として成績が上がれば、それでよいのかというと、いちがいにそうではなくて、内田先生がおっしゃったように、私はこころとからだのバランスが大切だと思っています。キーワードとして一つ目は「こころとからだ」のこと。それから二つ目としてやっぱり「授業の充実」です。授業は最も私たちに直接的にできることであり、実際に生徒の将来につながっていく大事な部分をしめていくと思っています。これは体育の授業であつてもそうですし、保健学習についてもそう思っています。

互いに心の解放ができ認めあえる状態であれば、子供たちは安心して体で表現できるようになります。またダンスは、かなり自由度の高い部分もありますし、お互い認め合わなければいけないところも必要不可欠になってくるので、そういった面でも、こころとからだの調和が図りやすい領域だと思えます。またダンスって、リズムに乗って体を動かす、みんなできるといふ気持ちがあるという側面からみても、運動が苦手な生徒で、自分を表現するなどの体を使った動きが、自分自身で動かし、自分の思ったことを表現するなど、みんなと体を動かすって楽しいな

とも機会があればやりたいたいという気持ちにつながるというのであれば、将来にわたってという、キーワードにも関わってくるかなと思います。

決定的な違いは、答えがたぐさんあるか、ほぼひとつになつてしまふか、ということ。答えとしてこれができないとだめだというと、教員にとつてもプレッシャーになつてしまう。それがダンスだと正解がいっぱいある。しかもどどんうみだされる、つまりどの人にとつても答え出せる。そんなところが、指導が苦手の人にとつては非常にはいりやすい。

ダンスを平成二十四年度に研究指定校として行ったのですが、これはさきほどでている、運動ができる子の視線から言うと、おそらくバスケットやサッカーとか、球技が大好きな生徒が多くいて、できない子は球技はちよつとひいてしまうような状況がみられます。ダンスはそのへんが激変するとか、球技が得意な子がダンスが得意かというところでもなかつたり、う

また、私たちは授業の中で評価しなければいけないのですが、もっと関心・意欲・態度、そして思考・判断の観点について正しく評価して子供たちを認めてあげられれば、子供たちは、仲間と一緒に認められてうれしかったという気持ちの面で、運動が苦手な生徒であつてもみんなの後押しを受けて技能に向かつていく子どもも増えていくのではないかなとも思っています。

後藤晃伸先生  
高校卒業後は、すべての生徒が進学するわけではないので、いったん区切りとなるこのカテゴリーでは、運動嫌いをなくすことが課題かなと思います。いずれ親になると思うんですが、そのときに「する」といった観点だけでなく、「みる」や「ささえる」といった観点で運動やスポーツの楽しさを次の世代と共有して、いってもらえると良いなと思います。そして、それが健康へと結びついていければいいなと思っています。先ほど、白旗先生から前任

校の違いということでは、質問があつて、それをずーっと考えていたんですが、体育的なことではないかもしれませんが、ひとつは我慢なんじゃないかなと。我慢の限界点が早いというか、そんなような違いが浮き彫りになつているのかな、と。そうやって体育の授業をとらえてみると、前任校では我慢ができるがゆえに教員の指示も聞かず、動くことは動かない。今、こうして現任校で、我慢の限界点の早い子に接していて気が付かれますね。今の子どもたちはどうかというと、いやなことはいや。やれることしかやりたくないと率直に表現するので、ある意味でわかりやすい。おなか痛いと行って見学していた子も、こつちで楽しそうにワーツとやっていると、お腹痛いのが治つたと言つて、授業に戻ってくるんですよね。で、入ってきておもしろくなくなると、またお腹が痛くなる。練習がずーつと同じような反復練習が多くなるとドロップアウトす

ダンスを平成二十四年度に研究指定校として行ったのですが、これはさきほどでている、運動ができる子の視線から言うと、おそらくバスケットやサッカーとか、球技が大好きな生徒が多くいて、できない子は球技はちよつとひいてしまうような状況がみられます。ダンスはそのへんが激変するとか、球技が得意な子がダンスが得意かというところでもなかつたり、う

また、私たちは授業の中で評価しなければいけないのですが、もっと関心・意欲・態度、そして思考・判断の観点について正しく評価して子供たちを認めてあげられれば、子供たちは、仲間と一緒に認められてうれしかったという気持ちの面で、運動が苦手な生徒であつてもみんなの後押しを受けて技能に向かつていく子どもも増えていくのではないかなとも思っています。

後藤晃伸先生  
高校卒業後は、すべての生徒が進学するわけではないので、いったん区切りとなるこのカテゴリーでは、運動嫌いをなくすことが課題かなと思います。いずれ親になると思うんですが、そのときに「する」といった観点だけでなく、「みる」や「ささえる」といった観点で運動やスポーツの楽しさを次の世代と共有して、いってもらえると良いなと思います。そして、それが健康へと結びついていければいいなと思っています。先ほど、白旗先生から前任

校の違いということでは、質問があつて、それをずーっと考えていたんですが、体育的なことではないかもしれませんが、ひとつは我慢なんじゃないかなと。我慢の限界点が早いというか、そんなような違いが浮き彫りになつているのかな、と。そうやって体育の授業をとらえてみると、前任校では我慢ができるがゆえに教員の指示も聞かず、動くことは動かない。今、こうして現任校で、我慢の限界点の早い子に接していて気が付かれますね。今の子どもたちはどうかというと、いやなことはいや。やれることしかやりたくないと率直に表現するので、ある意味でわかりやすい。おなか痛いと行って見学していた子も、こつちで楽しそうにワーツとやっていると、お腹痛いのが治つたと言つて、授業に戻ってくるんですよね。で、入ってきておもしろくなくなると、またお腹が痛くなる。練習がずーつと同じような反復練習が多くなるとドロップアウトす

ダンスを平成二十四年度に研究指定校として行ったのですが、これはさきほどでている、運動ができる子の視線から言うと、おそらくバスケットやサッカーとか、球技が大好きな生徒が多くいて、できない子は球技はちよつとひいてしまうような状況がみられます。ダンスはそのへんが激変するとか、球技が得意な子がダンスが得意かというところでもなかつたり、う

また、私たちは授業の中で評価しなければいけないのですが、もっと関心・意欲・態度、そして思考・判断の観点について正しく評価して子供たちを認めてあげられれば、子供たちは、仲間と一緒に認められてうれしかったという気持ちの面で、運動が苦手な生徒であつてもみんなの後押しを受けて技能に向かつていく子どもも増えていくのではないかなとも思っています。

後藤晃伸先生  
高校卒業後は、すべての生徒が進学するわけではないので、いったん区切りとなるこのカテゴリーでは、運動嫌いをなくすことが課題かなと思います。いずれ親になると思うんですが、そのときに「する」といった観点だけでなく、「みる」や「ささえる」といった観点で運動やスポーツの楽しさを次の世代と共有して、いってもらえると良いなと思います。そして、それが健康へと結びついていければいいなと思っています。先ほど、白旗先生から前任

校の違いということでは、質問があつて、それをずーっと考えていたんですが、体育的なことではないかもしれませんが、ひとつは我慢なんじゃないかなと。我慢の限界点が早いというか、そんなような違いが浮き彫りになつているのかな、と。そうやって体育の授業をとらえてみると、前任校では我慢ができるがゆえに教員の指示も聞かず、動くことは動かない。今、こうして現任校で、我慢の限界点の早い子に接していて気が付かれますね。今の子どもたちはどうかというと、いやなことはいや。やれることしかやりたくないと率直に表現するので、ある意味でわかりやすい。おなか痛いと行って見学していた子も、こつちで楽しそうにワーツとやっていると、お腹痛いのが治つたと言つて、授業に戻ってくるんですよね。で、入ってきておもしろくなくなると、またお腹が痛くなる。練習がずーつと同じような反復練習が多くなるとドロップアウトす

る。タスクゲーム的なものは、はいってけると面白くないって取り組む。そういうことを考えると、運動的な面白さをわかりやすく伝えていく必要があるんだろうと思います。もちろんどの校種でもそうだと思うんですけど、思考をつかうという

か、作戦や戦術的なものを、技術の高まりがなくてもできるような授業構成にしたいなとすごく感じます。そうやって、観たり考えたりする楽しさを伝えて、運動やスポーツに前向きに取り組めるような子を育てたいなと思っています。



司会（白旗和也先生）  
今の話というのは、次の

大学にもすごくつながっている話なので、

内田匡輔先生

私もいろんな学校に行くのですが、その中には不登校とか障害など、そういう様々な状況のある子ども達が通う、いわゆるグレーゾーンの生徒が通う学校で体育実技の授業を自分です。二年前ですね。その高校に行き、飛び込みで授業をやらせてもらいました。男子二十人、女子五人位のクラスでした。色々な生徒がいましたが、例えば、女子で、汗がでるから嫌だという生徒がいました。汗が出た瞬間、「汗かいた！」と制汗剤を体に塗る生徒がいました。後藤先生の話をお伺いしまして思い出しました。多様な生徒たちがあつまる。例えば、多動性の強い子は、あの私がやっている授業の間、興奮してきて、大声を挙げて体育館から出て行ってしまいう生徒もいました。他にも、おなかを痛いと言いつける生徒や、風船を使ったときの、「キュー

ッ！」という音がいやで、耳ふさいじやうとか。そんないろんな特徴のある子が一緒にいて、行える授業を創造する事や創り出す重要性を感じます。

大学でも、そういった学生たちにどう対応していくのか。キーワードとして、いつも思うのは「幅の広さ」、「多様さ」だと思います。これは横にも、縦にも必要だと思います。

ポイントになるのかなと思うのは、高校までは教員免許があつて、その教員免許を取得した方々が授業で教えることだと思います。ただ、大学はそういった免許がない。それでは、どういう人が教えるのか。スポーツについて研究している人や、非常勤では、そのスポーツでプロフェッショナルな方が教えて下さる。例えば実業団で教えていた人が講師になるという評判から受講生が増えたり、柔道では山下泰裕先生に投げられたりとか、井上康生先生に固められたりという人数が増えたりします。ある意味、立て幅が広いという

大学のメリットだろうと思います。「幅の広さ」、「多様さ」を横にとらえれば、用意している内容も従来の種目だけではないところがあります。具体的にはアウトドア種目を多く準備している事も特徴的です。たぶん東海大学はその種目は、非常に多彩だと思います。カー・サーフィンから、キャンプ、ゴルフなど。これらの指導する方々は、その道のプロです。サーフィンの授業で、空をみただけで、今日の天気はこうなるねという話から入る。その話だけで30分くらいもつてしまふ。実はその日はあまり波がなくて、うまくサーフィンができないコンディションだったのですが、海岸のつくりや波の様子と空の雲の様子だけで授業ができてしまふのです。教員免許あるわけではないのですが、普段から浜に出て、自然を観察している。だから様子を語ることができるのです。

私たちが、学校で何を伝えていくのか、というところが、学校の持っているしぐみと、本当に子供たちが興味・関心を持つというところに、ズレを感じる時があるのです。

大学だからできる、「幅の広さ」、「多様さ」の一端を担う役割として、私自身が担当している授業は、東海大学の中で他の学生と一緒に活動する事が難しい学生のクラスを担当しています。そこにくる学生は、先ほど話したように泣きながら話にくる学生がいます。ただ、この授業をとる学生達が最後に残す言葉には、毎回感動させられています。一週間前に話してくれた学生が印象的で、「体育の授業で笑っていいんだと思うようになった」っていうのです。

その学生は、高校まで体育実技授業をやっていて、自分ができないと、怒られて、授業の度にお腹が痛くなつて、という状況繰り返して、高校まで過ごしていました。では、それが体育の授業だと。ある意味、苦しみを味わうための修行になつていた様です。私は、「体育スポーツってそんなものじゃないよ」と少しでも感じてもらうために最初に、こう話

しました。「東海大学は駅から大学までちよつと長い坂をあがるよね。今日はここ（体育館）までくるのになどうやってきたの？」すると「歩いてきました」と応えてくれました。

「ここまででは歩けるんだね」とすると「はい」と馬鹿にされたのかなと怪訝な表情になります。そこで「ここまで歩いてもらえるなら、それ以上に体に負荷をかける事はないよ」と話します。安堵の表情を今でも覚えています。

私たちが、子ども達の身体にかけている負荷というものを、かけられる側から見た時に「なにか恐ろしい負荷をかけられている」気がするんだらうなと思うのです。こういういつた運動量という意味での「幅の広さ」「多様さ」ということを、教師はどこまで対応できるのか。強度や質を、どう工夫するのかという「幅の広さ」「多様さ」を教える側が重要なと思うんです。

山口由美子先生

他の校種から見ると四、五歳児は、宇宙人に見えるかもしれない。しかし、幼児の発想や動きなどは、とても新鮮で感動させられる事が多くあります。それでも経験や体験の少ない幼児から出てくる思いや考えには限りがあります。そこで、幼稚園で幼児期は、多様な遊びを通して体力づくり、人間関係づくり、伝え合うことや折り合いを付ける社会性などを培うこと。そして、家庭と連携を図りながら「基本的な生活習慣を身につけること」だと考えます。このような学びができるように保育者の援助や環境の工夫が重要なポイントになってきます。そのためには、二点、一つは指導者（保育者）の育成というか、保育の質の向上、もう一つは保護者⇨家庭との連携が大事かなと思います。以前にどこかでお話ししましたかと思えますが指導者（保育者）には四つの役割があると考えます。それは、「遊びの仕掛け人」「遊びの同士」「遊びの伝道者」「遊びの研究者」です。四つの

役割を果たすことで幼児が体を動かすことがすごく楽しい、お友達と一緒に動かすことが楽しいということ。を幼児期に経験することが大事だと思います。その楽しいというのはつらいことがあつたりするわけです。負けたり、ルール違反して、みんなに責められたりして、自分を振り返り嫌な気持ちになることもあるのだけれどそこを、ルールを守つたら仲良く遊べるんだ、楽しく遊べるんだ、友達が増えるんだ、このような経験をしたいれば、その後、つらいことがあつたり、やらなければならぬことがあつたりした時に、嫌なことや苦手な課題なども乗り越えられるのかなと思つています。もう一つは、やはり家庭との連携です。幼児期のある子どもは保護者は子どもに対してたくさんの希望をもっています。保育者のちよつとした助言を受け止めて子育てに反映してください。お母さんやお父さんに生活リズムを見直してもらつたり、食生活を見直してもらつたりする機

会を多くとる必要があるのかなと思います。『幼児期運動指針』には、「一日六十分以上の運動をしましょう」ということになっています。幼稚園によっては指導者を入れて保育されている園もあるようですが、幼児の実際の運動量はどうかと考えてみてください。園舎内外で幼児自ら遊ぶことは、楽しく体をたくさん動かしかつ、色々な体の部位を動かすということになるわけです。家でも楽しくからだを動かすようにしてほしいな、ということも思っています。以上です。

菅原健次先生

杉原隆先生の報告では、幼稚園の子供たちには、運動を教え込むことよりも自由に遊ばせている方が身体能力が伸びると述べていたように思いましたが、その点はいかがですか。

山口先生

ほつといたらというのは、たぶんほつておくだけじゃないと思うんですよね。子供が自ら遊べる環境がある

ことが大事なのです。「幼児が遊びを選択して自ら遊ぶこと」がポイントですね。そのために教師が、子供の興味・関心を捉え、発達の段階に応じた遊びの環境を構成しておきます。そして、子供の遊ぶ姿から環境を再構成するのです。こういう背景があると子供たちはたくさん遊んでいくよ、どんどん遊んでいくよということじゃないかと思えます。

菅原健次先生

それが基本的に幼稚園のそもそもの役割と。

山口由美子先生

そうですね。

菅原健次先生

よい環境を整えることが幼稚園の基本なんではないかと思えます。

山口由美子先生

そうですね。

菅原健次先生

ありがとうございます。

山口由美子先生



保護者の意識というか、価値観を少し変えていかなないと、小さいころからなんでも早くやれば上達していいだろうという意識を持っている保護者がいます。サッカーだとか、早くやればいつか実るだろうと、英語もそうですよ。自分の体が自分でまだうまく使えない時期に、ひとつのスポーツだけを特化してやらせたり、母国語の日本語がうまく使いこなせていない時期に外国語を習わせたり、文法が混乱してしまわないですかね。幼児期は、もともとと遊びの中から学んで欲しいです。思いつきり遊べるのは幼児期くらいですよ。発達の段階に応じて身につけるべきことがあると思います。

司会（白旗和也先生）

調査官時代にトップアスリートの方々と対談させていただくことが結構ありましたが、ここにも二通り育ちがあるなと思いました。小さいうちからいろいろな遊びや運動をして、幅広く様々な運動感覚を身に付けてきてトップ選手になっている人、もう一方は、小さいうちからその運動だけをしてきているので、それ以外は別に得意なものがないという選手と二通りありますね。

関口亮治先生

授業で考えていることで、子供たちに楽しく運動や運動遊びに取り組ませる、学年があがれば、運動の特性や魅力に触れながらということも大事になってくる。そういった楽しく取り組む中で、技能の内容ですとか、態度、思考・判断の内容をしつかり身に付けていくと

か、そして、これらを進んで運動に取り組む意欲や次の校種につなげていくのが大事な、と。白旗先生のお話を何回も聞くなかで、小学校でこんなことをやらなければいけないと思う部分でもありません。あと東京都の研修制度の中で、東京都教師道場という制度があります。ちょうど五年目から十年目くらいまでの方を対象にしているのですが、それにかかわらせていただいたときに、東京都では授業力の要素が六つあって、その人たちが本当に授業力の中で熱意とか使命感というものがある、本当に素晴らしい人たちがばかりで、授業実践していく中で、運動が苦手な子達を引っ張り挙げて、良い授業をたくさんやっていくんです。ただそのような授業を見ていく中で、これが課題なのかなど感じる場合があります。一つは授業力の教材開発という要素が課題としてあるのかなと。もう一つは指導と評価の一体化という、指導と評価という部分では少し課題があるのかなと思って

います。先ほどから、だんだん校種があがっていくと面倒くさいとか、我慢できないとかそういう話がでたんですが、この授業力と関連して、小学校のほうでは、もともと子供たちに魅力的な教材開発をし、面白い運動の場を提供して、楽しく運動を行う経験をもっとも増やしてあげれば先ほど話したことも改善されてくる部分もあるのかなと、聞きながら感じました。考えているところでは、そういうところで授業を充実していければと思っています。一時間一時間の体育の授業をいかに充実していくのかというところで、東京都小学校体育研究会では、特性や魅力に触れるために、各運動領域に合った授業モデルを構想し、つくるという研究もしてきています。

司会（白旗和也先生）

小中高であれば、体育の授業は必修ですからね、体育とその子がいかかわり方をしていけば、当然得意、不得意超えた部分にも魅力が感じられるでしょうね。

これが苦痛にしてしまうとさっきのはなしではないですが、苦痛から恐怖になってしまうのでしようね。

山口由美子先生

幼稚園の遊びに、跳び箱もあるんです。園によっては、「何段が跳べたか。」をねらいにして取り組んでいる保育を参観しました。また、小学校一年生の体育の授業参観をした時、三段・四段・五段と跳び箱を準備し、その跳び箱を縦にした横にしたりして並べてあり、順番に跳んでいる児童の姿を先生が帳簿を持ちながら評価をする。授業中に何の帳簿をもってられるのか疑問でした。でも、体育の授業はそうやるんだと思つてやっていました。そして、校内のある体育の先生が「そうやってやらないよ」という話で、模範授業をやつてくださったんです。その先生は、跳び箱を体育館の所々に三段から六段ぐらゐまでを置きました。そして、子どもたちに「ジャンプしても良いよ、乗り越えたり歩いたりしても良いよ、

そこからポーズとって降りても良いよ。」と伝えました。子どもたちは自分がやってみたいことを自ら考えて挑戦したり、友達の様子を見たりして楽しそうでした。全然表情が違っていました。幼稚園の運動的な遊びから小学校の体育という教科に変わるときに、うまく接続していただくと体を動かすことが苦手な子どもたちも自ら楽しく体を動かすようになるのではないのでしょうか。

司会（白旗和也先生）

小学校の授業づくりでむずかしいのは低学年だと思わずかしの低学年の体育が本当に大事ですから。そこそ指導のスペシャリストですね。そのためには幼稚園のことをもう少し学ばざるをえないのですが、逆に幼児期の発育を知らない人が幼稚園の運動的な遊びにはいつていくと、逆にやっちゃんですよね。学校体育の中学年から高学年の方法を幼稚園にもちこんじゃうすると、できた、できないがはつきりするから、子供

にとつては、ぼくはできないと、小さいうちから植えつけてしまう。低学年には満足感いっぱいにはやらせながら、でもちゃんと子どもがそれほど意識していない中でも最低限のことは身につけていくということなので、授業づくりがむずかしいんですね。ですから、専科が必要だとしたら低学年かもしれない。最後に課題に対して具体的に思っていることがあると思うので、そのことについて、簡単におはなししてもらえますか。ただし、一番聞きたいところは本番にどうして置いてください。

山口由美子先生

大きく二つあるかと思っています。一つは、幼児が大人中心の生活に合わせていることです。これは、企業の方も考えていた。働いたいなと思っっています。働きの家族の帰宅が遅くなったり、遅くまで営業している店があると利用したくない。これらも夜型の原因ではないかなと感じています。幼児期は、家庭

と連携して基本的な生活習慣を身につける。そのことが、義務教育以降の教育で学ぶ姿勢につながる。いいと思っっています。もう一つは、体力向上と言って体育指導員を入れたり、国際感覚を身につけるといって外国語の時間を設けたりするなど何かに特化した保育をするのではないと思っっています。私は、現場に戻って日が浅いのですが、市内のある公立幼稚園で体力向上の研究をしている幼稚園があります。その幼稚園では、遊びの中で多様な動きと動きの質を考えて環境を工夫しています。研究を進めていく中で家庭の協力も必要になってきて、おたよりや保育参観で幼稚園での遊びの様子や保育の様子と子どもへのかわり方を伝えるています。幼児期の教育は、幼稚園教育要領や保育所保育指針で示されている五領域を踏まえながら遊びを通した保育の展開をすることだと思っっています。遊びを通して心と体が育つて欲しいと思っっています。

司会（白旗和也先生）

また思い出して付け加えることがありましたら：。それでは小学校。

関口亮治先生

まず私の学校なんですけど、一つ取り組んでいるのが年間計画の見直し・修正ということなんです。指導内容のねじれというか、二学年のまとまりの中で、例えば四年生で行っている内容より、三年生で行っている内容の方が難しいというか、そのようなことがないかどうかということを取り組んでいることが一つあります。それから先ほどの授業の充実のことでは、もっと魅力的な運動だったり場当たりというものができないかということなんです。例えばボール運動の研究にかかわって、小学校は易しいゲーム、それから簡易化されたゲームというようになっていくんですけど、どういう視点でゲームが簡易化されているのだろうというところもあるんです。そのところではボール運動系の課題であると考えているので、こ

のような視点から改善していかうというのの一つあります。あともう一つが、運動とは少し離れてしまうのですが、生活習慣との関係で他教科とか領域とかとの関連を踏まえて健康教育の充実を図りたいと思っっています。先ほど朝ごはんという話があり、食育をどういう形で取り入れていくのかなどもありますし、あと、今学体連の事業でも足育という、足からの健康づくりということを勉強させていっただいていっるところですが、そういっただけでひろく運動領域を超えた部分での健康教育の充実を図っていきたいと思っっています。



田村新一先生

さつきも言いましたが、キーワードとしてここからのだの調和ということ。

それから授業の充実ということ。やはりすこやかな体は、すこやかな心からということ、互いに関係して

いると思います。秋田県を取組として早寝・早起き・朝ごはんは家庭学習という

のがあるんですが、「秋田わか杉つ子学びの十か条」という十か条あります。

この一番最初にあるのが朝ごはんは家庭学習、これは規則正しい生活を大事に

していきましようということ、家庭学習とついで、

力していきませんかというメッセージだろうなど、

ういうことをキーワードとして、家庭と学校とが意識

していくことで、それを当たり前に近づけていくとい

うことがあるのかなと思っ

ています。なので、私は学

と伝えていきます。最初に戻りますが、そのあたりを強くメッセージとして発信したいと思います。

それから県では、てくてく、とくとく歩いて学校へ行こう運動というのがありま

す。てくてくというのは歩いて、とくとくというのは

歩くといういろいろな得があるよということ。木々のゆれ

る音が聞こえる、虫や鳥のこえが聞こえる、下におち

ている落ち葉に季節を感じること、それから近所の方々に

あいさつする。歩くことによつてふだん見えていない

ことが見えてくるなど、得をすることがあるんだよと

いうことをもとに、健康と

いうことと登校しよ

うというところ、健康と

自転車に乗ってヘルメットをかぶって学校に行こうという

ことになっていきます。これは早寝早起きとつなが

ってくるので、生活習慣の中ですこやかな体の育成に

かかわるものだと思います。

あとは、授業の充実ですね、技能を追い求めていくとい

うことも、もちろん大事な部分なのですが、態度も確

実に指導されなければなら

ないと考えています。指導内容として、かなり具体的

に例示されています。仲間と協力するとか、役割を果

たすとかはつきりとした例

があるんです、そこを授業の

度としてこういう勉強をして、それを友達にこういうふう

に表現しているんだなという

ことが、その時間の中でふりかえることができ

るような状況をつくる。そこをしっかりと評価してあ

げる。そのことの積み重ねによつてうまくできていな

い仲間に対する言葉かけだ

ったり、「いいよ」「OK」などと言おうとしたりする

など、態度として表れてくるようになるのではないか

と思うのです。

そういう指導をしていくことで、声をかけられた運

動の苦手な子供が、だんだ

や、やはり大事なかなと考えるていきます。当然、保健学習も大切で、最終的にはヘル

スプロモーションの考え方

につながっていくように自分のことを考えていくため

にも、また理解したことを実際の生活の中に生かして

いくためには授業を大切に

していかねければならない

と思います。ただ保健の授業をやった、やらないとい

うレベルではなく、どうや

ったら生徒に伝わるのかという

ことを意識して授業を行う

ことが大切だと思います。

後藤晃伸先生

今、田村先生の話聞いて

て、やはり保健学習もとて

も必要な分野だと再確認

しましたし、それと同様に

体育論も大切になってくる

のかなと思いました。「す

り合いがなければいけない

というところがでてくるの

で、授業の充実というのは

く、継続的に運動にかか

わることができ、健やかなからだの育成といった意味で効果があるのかなど。先ほど話したことを合わせて考えると、どうしても技能の高まりがない子たちは、面白みが感じられないので、やる気がなくなつてなかなか行動がともなわない。じゃあ、どうしたらいいんだろうなどと考えると、技能を補うような授業展開提案していけばいいのかなと。そこでいろいろなことを楽しめたり、味わえたり、あぁ楽しいなと思えば次もやりたいという意欲につながっていく。そうやって続けられるから技能も高まつていくという感じのいい循環につながっていくのではないかなと思つています。当初は、タスクゲームをするということ自体に抵抗があつて、体育なんだから技能が第一で、それを身に付けさせるためにあるはずなのに、それを補うような授業展開は本末転倒ではないかというような意識にいたんですが、今は逆の論点から構築していくことで技能を高め

ていければ一番いいのかなという思考が変わつてきているんですね。ただ、そうは言つても技能が身に付くまでには、すごく時間がかかる。今、実際にやつている授業では、まったく運動が苦手なで、それこそ有能感がない子たちが多い状況でバレーをやつてます。ただ、バレーといつてもサーブもしませんし、レシーブもしません。今は、バドミントンコートで三対三をやつていますがサーブもただ投げるだけ、レシーブもキャッチするだけで、次の子に渡す。最後に渡された子は相手に返す。そうやつてなんとなくゲーム的に楽しめるようになっていき、得意・不得意も出てくると子どもたちのなかでも役割がでてくるし、役割がでてくると褒められる状況が出てきて有能感も育つてくるのではないかと。いろんなことをやつていくと生徒がそれを返してくれるので、勉強になつていきます。ただ、ザラっと頭にあるキーワードは、体育嫌いをなくすということ。そ

ういった意味で体育嫌いをなくすためには先ほどからいつていることが一つと、内田先生が話していた恐怖感というんですか、私もこういう研究指定校事業を受ける前までは、生徒指導的なことが先に出てしまい、それだけで終わつていたことが多々ありました。確かに将来的なことを考えると駄目なことは駄目と注意するので、それが全部が全部リンクしてしまうと、その恐怖感というか、生徒指導の場面ばかりが印象に残つてしまい、何の授業だったのだろうかという話になつてしまうので、その辺は教育者が自分の中で整理して授業をしないとけないのかなと感じています。以上です。

内田匡輔先生

保健体育という教科は、幼稚園の遊びから始まつて小中高の体育・保健体育と繋がっています。大学に進学してくる学生たちは、その教育をすべて受けた保健

「学び」をした学生です。ですが、学生達の学びは、「いびつ」なのだろうなと感じます。だからこそ私は大学で取り組むべきは「体育・スポーツのサーフティネット」ではないかなと思つています。何をしてもうまくいかない子たちは、必ずいます。私は、障害のある子達の体育・スポーツにかかわつていくなかで、例えば内部障害、心臓疾患を抱えている、学生でもできるスポーツはあると思つています。心拍数を挙げないという制限だけならば、ターゲット型フリーブロー（吹き矢）などが面白いと思つています。または、呼吸器系の障害で息を吹き出す事が難しいならば、ボッチャやペタンクでもいい。こういった、何かしらできる内容を常に持つ事。これも一つのサーフティネットの在り方です。指導者養成の一つとして必要だと思つています。保健体育に精通している体育学部に進んでくる学生は、ひとつの種目に偏つていたり、または技能的にうまいことだけを評価しがちになる。

こういった偏りを無くす事も、サーフティネットの重要な面だと思います。例えばスポーツ文化的の四つの側面、「する」「みる」「しらべる」「ささえる」という体験がバランスよくできているのかというのが視点になるでしょう。「する」、「みる」という体験が非常に多くて、「しらべる」「ささえる」という体験が非常に少ない。例えば、今日もやつているのですが、東海大学で日本のリトルリーグの大会を、学生が自分たちで運営して、その大会の裏方として働いて、中学生・小学生を誘導して大会を運営しています。こういった大会の運営を体験する、作り出していくという場面を大学がどんどんつくつていく。現実にできる体現する場所というのが大学だとするならば、機会を増やす事で、学生の学びが豊かになりサーフティネットの目が細かくなる。例えば保健でヘルスプロモーションと言葉はしているけれど、実際に体現する事は難しい。そこで、

最近の携帯電話には歩数計がついていて、自分の運動量を目で見られるようにしてみる。実際に、目で見ることからわかる事が体育スポーツには多くあるはずなのに、授業で語るだけになってしまいう状況があるのではないのでしょうか。

先生方の話の中で、保健の重要性についての話がありました。自分の娘(中二)の学校も毎週時間割が出ます。先日「やっぱり今週は雨が降ったから体育が保健になった。ラッキー」というんですよね。雨降り保健は問題だと、私も大学の授業で学生に言いながら、自分の子どもたちや、教育実習生の話を聞いていくと、この四・五年さらに増えていると思うぐらい、保健の授業が計画的に行われていない学校が多いように感じます。

体がどのように成長するのか。例えば大学生に自分の授業の中でスキヤモンの発育発達曲線を取り上げます。中学校の最初の段階です。中学の内容ですが、大学の九割は、正確に書けま

せん。理解もできていません。残念ながら。最低限人間が成体になるまでのどういう発育・発達の特徴があるのかというのをおさえていなければならぬ内容すら、大学生は分かっている。体育スポーツの意味や価値を伝える以前に人間の成長への理解が浅い。この理解が浅ければ、セーフティネットの柔軟性はなくなってしまう。

大学生は未来の指導者です。ですから、どうセーフティネットを広げ、体育やスポーツの楽しさや、面白さを伝承して行くのか、重要な課題であると思っています。

いずれにしても大学を出ると、社会に出て行きます。例えば自分が働きながら体を動かしていくという機会がどうしたら得られるのか。例えばスポーツ施設はこうやったら使えるよといった話を、自分の授業ですることがあります。私住んでいる家の近くの市民センターに併設されているテニスコートは一時二六〇円で使えるんだというのと、「えー、そんなに安いのか？」となるわ

けです。インターネットや電話で予約すれば使える。そういう施設の使い方も学生は知らない。このまま社会に出してしまう。自分とスポーツの具体的な関わりをどう想像できるのかも問われていると思います。施設の使い方も含めて、「幅の広さ」「多様さ」を兼ね備えたセーフティネットの視点をもった指導者がいなければいけないのかなというところ。どう育てるのかも含めて大学の課題であると思います。



司会（白旗和也先生）

皆さんの話の中にキーワードがしっかりと含まれていました。例えば幼稚園で

あれば、保育者がどう遊びを広げていったらいいのかとか、運動というものをどうとらえたらいいのか、といったことが非常に鍵ですね。運動というよりは、楽しい遊びを広げていくことが大切です。小学校は、組織的に、授業プラスいわゆる業間も含めたところをやりやすい。当日はこのあたりのことをふれてもらえるといいかな。中学校は自己の生活習慣を見直すことが知識との関係で意図的にやるようになっていきま

す。このことでは、保健との関係も重要です。高校は、学校体育の出口ですから、そこを見通した授業づくりが必要ですね。領域も選択しますから、将来のことを考えて、それをしっかりと深める授業が作れているかが問われるでしょう。それが大学につながっていくんだらうなど。

大学では、社会人としてスポーツライフへの、具体的な出口というのか出发点というのかとして、どう大学がかかわっていくことと、もう一つは指導者養成です

ね。大学の体育科教育の研究者はほとんど教員養成もやっていますから、この二つが一番キーワードになるのかなと思います。

今日は、あと少し聞きたいくらいで留めていますので、これから全国大会当日に向けてまとめていきましょう。

全国大会当日は簡単に、今日の内容を触れた上で、今日話したことのより具体的な実践を提供してもらいたいことが一つです。二つ目は、体力に関わることなんですよ。それぞれの校種で体力というのをどうとらえて、何故体力を向上しなければならぬのかということに話を結びつけてもらうと、非常にすっきりするのかなと。人が育っていくうえで、運動とか生活習慣を見直していくことが極めて重要である、ということですね。

それから三つ目としては、幼児期の前から大学、また出たあとも含めてつながりがあるから、みんなできちんと考えていかなければいけない問題であるということです。

それでは、今日はお疲れ

様でした。

菅原

有り難うございました。

この続きを、十一月十四日  
木曜日、両国国技館のシン  
ポジウムでお伺いすること  
を楽しみにしております。

## 全国学校体育研究大会 近年度開催地のご案内

第52回全国学校体育研究大会（平成25年度）開催地 東京都 平成25年11月14・15日

第53回全国学校体育研究大会（平成26年度）開催地 岐阜県 平成26年11月6・7日

第54回全国学校体育研究大会（平成27年度）開催地 広島県 平成27年11月12・13日

第55回全国学校体育研究大会（平成28年度）開催地 福島県

第56回全国学校体育研究大会（平成29年度）開催地 和歌山県

第57回全国学校体育研究大会（平成30年度）開催地 佐賀県

# 第五十一回全国学校体育研究大会北海道大会を終えて

## 第五十一回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

会長 飯沼 晃



### 平成になって三度目の全国大会

平成に入ってから三度目となる全国大会北海道大会は、四季の彩り鮮やかな北の大地北海道、時計台の鐘が鳴りわたるロマンの街札幌市を中心に開催しました。「北海きたえーる」を全体会場にしたものの、そのスペースに見合う参加者が来道・来札してくるのかと心配しましたが、一七〇〇名を超える方々を迎え成功裡に終えることができ、大会関係者一同ほっと胸をなでおろしたのがつい昨日のようです。

本大会では、北海道から体育学習の在り方を全国に提案したいと考え、過去2度の大会成果と課題を踏まえ、プレ大会、プレ大会と組織力を強化しながらじっくりと準備を進めてまいりました。折しも、改訂された学習指導要領が完全実施となって小学校は2年目、中学校は初年度ということもあり、参観してくださる方々の期待に応える授業を展開しなければならぬという不安と緊張を抱きながらの開催でした。しかしながら、全体会での貴重な発表や各分科会での参観者の皆様から活発なご意見・ご助言をいただき、新しい時代における学校体育の在り方について学び合う絶好の機会となりました。

### 主題設定の背景

北海道学校体育研究連盟は過去2回の全国大会の成果と課題を踏まえながら、道内各支部が持ち回りで毎年

開催している全道大会を通じて、「仲間とのかかわりを通じ、人間的な成長を促す体育授業」を基本に据えながら、誰もが夢中になって運動に取り組むことのできる教材の開発・工夫や課題解決的な学習の構築、個々の学びや技能の高まりを促す支援の在り方などを中心にオール北海道で研究を進めてきました。しかしながら、全国に比べて体力・運動能力が下回っているという北海道の子どもたちの実態が浮き彫りになり、改訂された学習指導要領では「学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る。」と述べられるなど、今までの研究にプラス・ワンが必要であると強く感じました。そこで従来までの北海道の体育研究、子どもの実態、学習指導要領の

趣旨を踏まえ、本大会の研究主題を「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」と設定しました。また、体育学習の充実とは、すべての子どもの学びの場である授業の工夫・改善そのものであり、すべての教師の創造的な仕事であり責務であることから、副主題を「授業から日常へ、授業から未来へ」としました。「体を動かす気持ちよさの体験」や「仲間と協力したり、教え合ったりして、課題を解決していく姿」、「自他の良さを生かしながら運動に粘り強く取り組み、達成感や自信を得ていく姿」などを目指しながら、授業づくりに取り組みました。どの授業者も、授業づくりに携わった者も、何度となく産みの苦しみを味わいながらたどり着いた授業を、全国の皆様にご覧いただけたことは、授業者のみならずこれからの北海道学校体育研究の大きな財産となるものです。

### 北海道の体育研究人の心意気

本大会のキャッチフレーズ「北海道O!PLUS O NE」には、常に新しいものに取り組みもうという私たち

北海道の体育研究人の心意気が込められています。今後も、心と体をより一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながることを考え、「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」を図っていく所存です。

大会開催に向け4年をかけて準備をしてまいりましたが、日々の学校業務を抱え多忙な日々を送りながらも周到な準備、そして運営にあたってくださった多くの大会実行委員会事務局・専門部役員、運営委員すべての方々に、改めて感謝申し上げます。最後にになりましたが、北海道大会を開催するにあたり絶大な力添えをいただきました。文部科学省、公益財団法人日本学校体育研究連合会をはじめ、関係諸機関、講師、指導助言者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

# 第五十二回全国学校体育研究大会東京大会開催にあたって

## 第五十二回全国学校体育研究大会東京大会実行委員会

会長 古家 眞



第五十二回全国学校体育研究大会東京大会の開催にあたり、御挨拶を申し上げます。

東京での開催は昭和五十四、五十五年度の連続開催以来三十三年ぶりです。ぜひとも多くの皆様の御参加をお願い申し上げますとともに、私たち東京の研究への御批正を頂戴できれば幸いです。

また、さる九月八日に、二〇二〇東京オリンピック開催が決定し、東京の幼小・中・高・特別支援の各校園の子どもたちと教員が大きな喜びに沸いたこともお伝え申し上げます。全国

の体育・スポーツに関わる全ての皆様の力を結集して東京オリンピックを成功させようではありませんか。

さて、平成二十年度から順次改訂された学習指導要領の体育・保健体育においては、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、小学校から高等学校までの十二年間を見通し、発達の段階を踏まえた系統性のある指導と各領域の指導内容を明確にしつつ、その定着がより一層図られるよう求められています。

そこで、本大会の開催に向けて、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、子どもたち一人一人が各種の運動がもつ特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、研究を進めてきました。

具体的には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を身に付ける体育学習」という大会主題のもと、幼小・中・高・特別支援学校の各校園種ごとに発達の段階や障害の状況に合わせて研究主題を設定しました。

さらに分科会会場ごとの各運動領域に合わせた研究主題を設定することにより、研究の内容を明確にするとともに、焦点化を図ってきました。

そして、研究が進展してきた昨年七月より、幼稚園一園、小学校九校、中学校三校、高等学校二校、特別支援学校二校全ての分科会会場校十七校園でプレ研究発表を行いました。このプレ研究発表によって、各校園の授業研究や会場校運営にあたっての課題や達成目標等が明確になってきました。大会二日目には各分科

会会場がこの研究の成果を発表いたします。研究主題に沿って活発に研究協議が行われることを期待しております。

また、両国国技館での全体会においてトヨタ自動車株式会社名誉会長・日本体育協会会長の張富士夫様より特別講演「スポーツの振興と学校体育への期待」を頂く予定です。

これまで、大会運営・授業研究等本大会開催に向け、文部科学省をはじめ公益財団法人 日本学校体育研究連合会、東京都教育委員会、前年度開催の北海道大会実行委員会の皆様のご指導・ご助言をいただきながら準備を進めて参りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

私たち実行委員会は、全国から体育を研究する皆さんの皆様をお迎えできる

ことを大きな喜びと感じ、十一月の東京大会まで、各分科会会場校としつかりと連携しながら、十二分な準備をしてまいります。

御参会の皆様が、両国国技館に、そして十七の分科会会場校園にいらつしやることを心待ちにしております。



第9分科会	園・学校名 町田市立南第四小学校
<p>《分科会研究主題》 一人一人のよさをのばす 陸上運動系の指導の工夫 《授業の見どころ》 発達段階を明確にした全学年の陸上運動系の授業を公開します。 ①遊びの種類を豊富にした低学年の授業 ②競争（走）を中心にした中学年の授業 ③達成型を中心にした高学年の授業 ④遊びや競争を中心にした特別支援学級（知的・情緒）の授業</p>	
公開授業領域：走・跳の運動（1～4年、特別支援学級）、陸上運動（5・6年）	
指導助言者：愛媛大学 日野 克博	

第6分科会	園・学校名 葛飾区立葛飾小学校
<p>《分科会研究主題》 分かる楽しさやできる喜びを味わい、意欲的に運動に取り組む力を身に付ける器械運動系の学習 《授業の見どころ》 発達段階に応じた器械運動の取上げ方の工夫として、低・中・高学年それぞれ2学年を見通した指導と評価の計画に基づいた授業を行います。言語活動の充実も発達段階を踏まえた取組を行います。</p>	
公開授業領域：鉄棒を使った運動遊び(2年)、鉄棒運動(3年)、マット運動(4・6年)、跳び箱運動(6年)	
指導助言者：宮崎大学 三輪 佳見	

第10分科会	園・学校名 東京学芸大学附属竹早小学校
<p>《分科会研究主題》 友達とのかかわり合いを豊かにし、進んで運動に取り組むゲームの学習 《授業の見どころ》 1年の鬼遊びでは、相手をかかわす楽しさを充分味わえる「ドーナツおに」です。3年のアタックプレルボールは、中学年のネット型ゲームで、子どもたちが取り組みやすいように工夫しました。4年のセストボールでは移動式の簡易ゴールを設置して得点を競い合います。</p>	
公開授業領域：鬼遊び（1年）、ネット型（3年）、ゴール型（4年）	
指導助言者：東京学芸大学 松田 恵示	

第7分科会	園・学校名 府中市立府中第十小学校
<p>《分科会研究主題》 仲間とかかわり合いながら、なりきって踊る楽しさを味わう表現運動の学習 《授業の見どころ》 本校では、表現運動を取り上げ、全学年で授業の改善に取り組んでいます。今回公開する3年生と6年生の表現の授業は、文部科学省から出された表現運動の指導資料を生かし、授業づくりを進めたものです。どちらの学年も「即興的に表現する」ことにポイントを置いています。</p>	
公開授業領域： 表現運動：表現（3年）、表現（6年）	
指導助言者：ノートルダム清心女子大学 安江 美保	

第11分科会	園・学校名 千代田区立麹町中学校
<p>《分科会研究主題》 主体的に学び、かかわり合いながら課題解決を図る体育学習。～運動の特性や魅力に応じた学びの追究を通して～ 《授業の見どころ》 体育授業に関する愛好度調査の結果より、体育が不得意で、自信がもてない生徒に対して、指導計画や指導方法等を工夫することにより運動に親しむ資質や能力を身に付けさせ、意欲を喚起しようと考えました。</p>	
公開授業領域：器械運動「マット・平均台」(2女) 球技 ゴール型「バスケットボール」(2男)	
指導助言者：東京学芸大学 水島 宏一	

第8分科会	園・学校名 調布市立第三小学校
<p>《分科会研究主題》 かかわり合う中で 一人一人が高まるゲームの学習 《授業の見どころ》 長年に亘って研究・開発したゲームに取り組みます。児童にとって魅力あるゲームにすると同時に、技能や意欲、思考力を高める効果的な指導の工夫についても研究しました。授業では、これらの工夫をわかりやすく提示します。</p>	
公開授業領域：鬼遊び(1年)、ボール投げ(2年)、ネット型(3年)、ゴール型(4年)	
指導助言者：国士舘大学 細越 淳二	

第15分科会	園・学校名 東京都立 東 高等学校
《分科会研究主題》 主体的な取組を促す体育学習の実現を目指して  《授業の見どころ》 生徒が生き生きと主体的に課題解決に取り組めるよう、授業毎に目的を明確にした働きかけを心掛けています。 生徒が自主的・主体的に表現活動に取り組もうとしていく姿を御覧ください。	
公開授業領域：ダンス（1年）， ダンス（2年）	
指導助言者：愛媛大学 牛山 眞貴子	

第12分科会	園・学校名 港区立御成門中学校
《分科会研究主題》 運動の特性や魅力に応じて体を動かすことの楽しさや喜びを味わい自主的に運動やスポーツを実践しようとする態度を養う体育学習 《授業の見どころ》 ダンスでは、既成のものにとらわれず身体の様々な部位を使い、リズムや音楽にあわせてイメージを豊かに膨らませながら踊ります。柔道では、基本的な動作や技を身に付け安全に攻防を楽しみます。	
公開授業領域：ダンス「現代的なリズム」 （1年女子），武道「柔道」（2年女子）	
指導助言者：秋田大学 三戸 範之	

第16分科会	園・学校名 東京都立文京盲学校
《分科会研究主題》 個々の障害の状態に配慮した適切な運動の経験を通して、明るく豊かな生活を営む力を身に付ける体育学習 ～フロアバレーボールの実践を通して～ 《授業の見どころ》 本校では、生徒が積極的に参加し、運動の楽しさや協力することの大切さを学習するよう工夫して指導しています。ボールの音や後衛の選手の指示を頼りに動く前衛の動きが見どころです。	
公開授業領域：球技（高等部1年） 球技（高等部2・3年）	
指導助言者：筑波大学 澤田 晋	

第13分科会	園・学校名 墨田区立両国中学校
《分科会研究主題》 運動やスポーツを実践的に味わい、必要性を科学的に理解し、実生活において活用しようとする態度を養う体育学習 《授業の見どころ》 生徒のスポーツ実施状況調査の結果から運動する習慣がほとんどない生徒の割合が多いことが分かった。そこで、体づくり運動と体育理論の学習を通して、より運動を身近に感じ、生活化を進めようとしてしました。	
公開授業領域：体づくり運動（1年男女）， 体育理論（1年男女）	
指導助言者：筑波大学 菊 幸一	

第17分科会	園・学校名 東京都立調布特別支援学校
《分科会研究主題》 個々の障害の状態に配慮した適切な運動の経験を通して明るく豊かな生活を営む力を身に付ける体育学習 ～「動きの良い体づくり」を求めて～ 《授業の見どころ》 公開授業では、「体づくり運動」を通して、小学部では多様な動きを、中学部では体力を高めたり、体をほぐすための運動を取り入れたりして、児童・生徒が主体的に運動に取り組む授業を目指します。	
公開授業領域：基本的な運動（小学部3年），体づくり運動（中学部）	
指導助言者：子ども教育宝仙大学 松原 豊	

第14分科会	園・学校名 東京都立飛鳥高等学校
《分科会研究主題》 「運動を合理的・計画的に実践する力を自主的・主体的に身に付ける体育学習」 『生徒がつくる授業』生きる力を育む 《授業の見どころ》 教師の支援のもとで、リーダーとメンバーの役割分担、意欲や目標、授業計画とその実践方法、個々の結果の捉え方などを的確に指導します。生徒のつまずきも成長の糧に変え、生徒自身の力でチームワークや達成感を掴み取れるように導くことで「生きる力」を育みます。	
公開授業領域：球技（3年）	
指導助言者：立命館大学 大友 智	

# 平成二十五年度全国学校体育実技指導者講習会

## ■実技内容のポイント■

### 幼稚園・保育園の部

日時…7月26(金)

会場…東京都千代田区立富

士見小学校 体育館

幼・保から小への円滑な接続を得るために、からの動かし方の根本と遊びが運動として形づくられていく過程に注目した講習会を実施した。

① ≪幼児・児童期の運動遊び及びコーディネーショントレーニング≫

幼児の遊びを見ると、ことぽを交し遊ぶというより互いに感じ合いながら遊ぶ姿が多い。講座では、この幼児の遊び方を、即興的な運動遊びとして体験した。そして、そこに表現されるお互いの動きに、幼児の楽しむ遊びの自由さ・創造の喜びを体験した。

講師…東京女子体育大学教授 秋山エリカ先生

② ≪幼・保・小連携による子どもの健やかな身体と体力の向上≫

保育内容「健康」、教科「体育」のねらいを成長の視点から解説。実技では、グループで考え出した遊び発見までの経過が発表され、遊びは遊び手の面白さ追求に生じる無限のものであることを認識。子どもたちの限らない遊びへの理解を深める機会となった。

講師…東京福祉専門学校 戸田大樹先生

③ ≪ボールあそびで運動の質と楽しさを広げよう≫

ボール遊びに魅了される幼児・児童の反応を想起しながら、運動能力の発達を年齢別に解説。そして、ボールを使った一人あそびから集団遊びへ展開していく遊びが紹介された。

講師…創価大学児童教育学科教授 井上アヤ子先生

④ ≪日常にみられるあそびから「跳び箱運動」への導き≫

幼児たちの日常遊びに見られる「走る、跳ぶ、跳び越す、着地する」様子に注目し、それらの多様な展開が紹介された。そして、各々の動きにおける支援（運動補助）のタイミングを学んだ。

飯田女子短期大学元教授 田中美智子先生

⑤ ≪森とあそびの関わり≫

ピンポン玉、ハンカチ、ロープ、シート等を利用した遊びを体験。遊びで身に付けた技術を活かし、園庭の木陰づくりや保育室での遊び環境づくりなど、手軽に誰もが屋根のある空間を作れることを学んだ。

講師…東洋大学非常勤講師 田代浩二先生

## ◆講習会の様子◆

### 小学校の部

日時…7月29日(月)

会場…東京都千代田区立

昌平小学校



① マット運動を中心とした実技講習会であった。まずマット運動につながるやさしい運動を仲間づくりを兼ねて楽しく実施。ゆりかごから開脚前転を二人一組で行った。また、マットを2枚にたたんで背支持倒立から開脚をぎりぎりまで抑えた開脚前転。さらに、後転の練習。両手ひらの支持を確かに行うことを学習した後、『イチ、ニツ、サアーン』のサーンのタイミングにおしりを後方に落として実施。最後は、前転してボールキャッチを全員できるようにしてくれた。



講師…桐蔭横浜大学教授 松本格之祐先生

②ゲーム領域で『セストボール』『アルティメット』を講習していただいた。その歴史から始まり、運動が充実すると休憩を兼ねながら合間合間に、映像を映しながらわかりやすいルールの取り入れ方、そして、試しのゲーム、作戦を2点に絞ってグループ毎に考えさせた。ポイントとは、『ノーマーク』『ゴール近く』考えた後は練習させて試合を実施。アルティメットでは、その導入の理由から始め、投げ方取り方を練習した後ゲームを盛り上がった行った。疲れを忘れてゲーム②夢中になった講習である。



講師…東京学芸大学  
准教授 鈴木 聡先生

7月30日(火)  
③体づくり運動領域では、児童に対するストレッチのポイント指導があった。次に、長なわを二人組、四人組でぐり抜けたり、心を合わせて一回旋一跳躍を全組でできるようにした。心の盛り上がり背景として、二人組で背中合わせになり立ち上がる運動を、できないことから学び始めた。できない児童の理由を基に、指導の仕方を実践した。さらに、ケンステップによるリズム跳びをアクセントをつけて練習。結びは、二人跳びと8人跳びを創作した。達成の喜びを味わえた。



講師…国士舘大学教授  
細越 淳二先生

④ボール運動『ハンドボール』では、ボールを使った様々なコーディネーション運動を行った。一人から二人、三人組へとボールの扱いも仲間と息を合わせて実施しないとできない運動が用意されていた。講師のこの指導があつて、ただ真似るだけでは無い練習がためになった。『左足、右足、左足、パス左足着地』でシート練習。なぜ両足でないかをわかりやすく説明を受けた後、コーンタッチゲーム、キーパーの段階的指導の後、ルールの説明後、ゲームを力いっぱい行った。充実した時間であった。



講師…筑波大学助教  
山田 永子先生

### 中・高等学校兼特別支援学校対象の部

日時…8月6日(火)

会場…東京都立千早高等学校  
校 武道場、体育館他

柔道講師…灰原菜美先生(講道館道場管理室指導員) 高嶋康隆さん(東京農業大学柔道部4年)

バレーボール講師…関毅彦先生(千葉科学大学学園東京事務所東日本地区広報室参与東京支局長)

講習会の趣旨は、全国の特別支援学校・中学校・高等学校保健体育指導者が、指導技術の向上を図るとともに、資質の向上と指導の充実・発展を目指すこととした。

午前中は「武道・柔道」の講習会をおこなった。内容は、礼儀作法の意味や受身、投げ技、固め技などについての技術指導等であった。そのポイントは、指導者の経験等を基にした「教え込み」による指導ではなく、「生徒たち自身に考えさせる」指導を行うことが重要で、指導の結果楽しく安

全に生徒が柔道に親しむことができるようになることを学んだ。とくに「安全の確保、ケガの予防」について生徒自身が意識することができるといふように工夫されていた。具体的には、寝技のゲームを行うときに、多くの場合2人組をつくらせるが、あえて3人組をつくらせて余る1人に安全(場所も含めた)の確保と審判の役割を与える。それによって、自然に生徒たちが「安全」に対して意識できるようになっていた。また審判を行うと客観的に人の動きを見ることができるといふことができれば押さえ込むことができるといった状況を理解でき、審判をしている生徒自身の学習にもなっていた。



午後は「球技・バレーボール」の講習会を行った。前半はコディネーショントレーニングの理論に関する講義とその利用方法などを学んだ。特にリトミック的要素である「右手と左手での異なる動作」を行うことは難しいが、練習によってできるようになることを体験を通じて学んだ。後半は実際の実技としてコディネーショントレーニングを使った準備運動をはじめとして、ボールを使った各種技能の指導について学んだ。キーワードは「点」「線」「面」であり、「点」の状態が最も易しい技能で「面」が最も難しい技能となる。生徒に指導する際に、「面」の状態で失敗するなら「線」で成功を目指す、それもだめなら「点」の状態で成功させる、といったように失敗するケースは課題の段階を下げて成功させてから、次のステップに進ませることが重要であることを学んだ。また運動の苦手な初心者がどのような動きをする可能性があるか、それによりどのようなケガをする可能性



があるか、などを含めた「安全に関する指導」についても講習全体を通じて学んだ。

# 平成二十五年度 足元からの健康づくり『足育』(あしいく)の推進について

1 足育事業発足の契機  
(1) “大きめの靴がちょうどいいという子どもたちの感覚”

り、中学女子の約30%に外反母趾兆候”

三年前、本会事業として

“足育指導資料作成委員会”

を立ち上げた当時、「足育」

は「ソクイク」と呼んでい

たが、「アシイク」と改称

し、その名称の意味と発音

が結びつきやすい形にし、

全国各地での普及を目指し

ている。

そのきっかけは、JESの

小中高校生一人人に対する

調査である。『43%もの子

どもが爪の痛みや靴づれ、

踵痛などのトラブルを経験

し、中学女子の約30%に外

反母趾の兆候』この記事を

目の当たりにして、本会で

はその対応策を学校教育と

して取り組むこととした。

## 2 足育事業の経過

### (1) 一年次の取り組み

まずは、小学校教育から

と考へ、初年度は、小学校

体育科から足場づくりを始

めた。

一年生の「体づくり運動」

領域ならば、特に「体のバ

ランスをとる運動」や「移

動や力試しの運動などの直

立二足歩行の動きを安定し

た姿勢で行う運動」を通し

て、運動の心地よさに触れ

ながら、おもしろい動きや

体の使い方、適切な運動靴

を履いた時の足や足指の体

感に気付かせる学習活動を

取り入れやすいと考えた。

同時に、「足指体操」を考

案し、試みた。

### (2) 二年度次の取り組み

足育を教育活動全体の中

でどのように位置づけられ

よいか全体計画を作成し、

四年生と五年生の学級活動

『保健指導』で実施した。

ここでは、「あつそうか”

“そうだ” “そうしよう”

という学習の合言葉によ

り、「気づき・考え・行動

する」学習の流れとなるこ

とを意図した。課題解決的

な学習過程を組み立てるた

めの確かな手応えを得た。

### (3) 三年次の取り組み

低学年の児童を対象に「足

育」を保健指導で行った。

別紙のような指導案と、学

習効果を上げる紙芝居を作

成した。一年生児童の興

味・関心や理解度に我々の

予想以上の効果があった。

指導者の示す紙芝居の場面

毎の発問に対して、子ども

たちは次々に教師の前に歩

み寄り、『靴の履き方、靴

の大きさが適正ではなかつ

た。だからしっかりとした

走り方、歩き方ができない。

また、姿勢の悪さもその原

因の一つである。』など、

私たちが設定した学習のね

らいに、想定していた以上

のスピードと的確さで迫つ

た。

この間の実践を通じて、足

育を広く小学校教育活動に

位置づけられる成果を得

た。そこで、当初の目的で

ある指導資料集の作成を本

年度の主たる事業とした。

その一方で、この成果を各

学校で授業として実践して

もらうためには、授業その

ものを体験してもらうこ

とが必要であると考へ、『出

前授業』の形で広く学校に

紹介することとした。その

実践の具体的な場として平

成25年8月にJESと本

財団共催により「足育研修

会東北大会」を実施した。

約一五〇名の学校教育関係

者の参加を得て、『足育の

考え方』『模擬授業』『足

指体操』などについて講演

やワークショップなどを通

じた研修会とした。

熱心な受講者の反応もあ

り、出前授業の有効性を確

認することができた。

今後の課題として、学校

での足育授業実践を支援で

きる指導者を派遣できるよ

うな体制づくりが必要と考

える。即ち、『足育マイス

ター』制度の立ち上げであ

る。

『足育マイスター』認定基

準として、左記のような内

容を想定している。

(2) “43%の子どもに爪の痛みや踵痛のトラブルあ

ってきた証である。

か確かな体感をもたない状

況で大人も子どもも暮らし

てきた証である。

その授業者が、履き心地の

よさを体感できるようにな

ったのは、一週間あまりの

体験学習後であった。適切

な靴の状態とはどんな感覚

か確かな体感をもたない状

況で大人も子どもも暮らし

てきた証である。

『足育の公開授業実践者』

『足育の研修会の公式参加者』

『足育の授業実践を広める意欲と能力のある者』

以上、教師と企業の研究団体がそれぞれの専門を生かした研究実践を行ったこの事業は、事業共催団体である「日本教育シユーズ協議会」の多方面にわたる支援を受けて展開された。本会が公益財団法人として展開する事業分野の貴重な第1歩でもある。

むすびに、本年度全国大会（東京大会）にて配布する本指導資料集並びに資料DVD等が各学校において活用され、幼児・児童・生徒が足元の不安を解消できる健康な生活づくりに寄与できることを願っている。

### 3 足育指導資料作成委員

内木 勉（練馬区立大泉西小学校副校長）

眞砂野裕（昭島市立拝島第一小学校副校長）

関口亮治（足立区立新田小学校主幹教諭）

吉川則久（奥多摩町立古里小学校主幹教諭）

武田千恵子（足立区立足立小学校主任教諭）

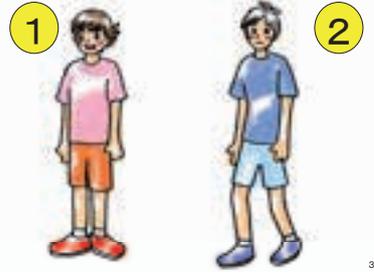
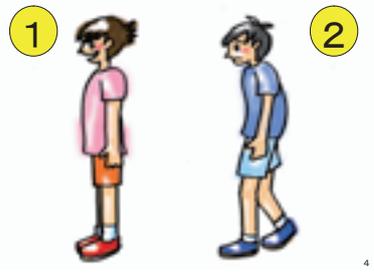
足育 学級指導 低学年「足元からの健康づくり 正しい姿勢、歩き方と靴の履き方」

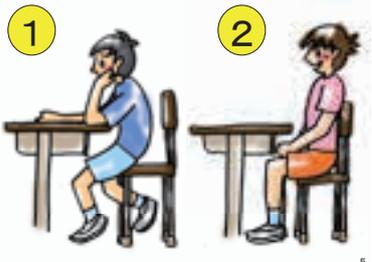
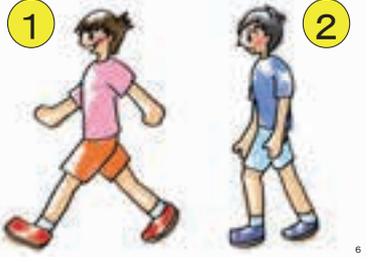
【紙芝居の登場人物】

☆げんきくん いつも元気で、健康的なキャラクター

☆へとへとくん 前向きに頑張っているが、げんきくんと対照的に、元気が出ないキャラクター

☆ジェス教授 足元の健康を正しく導く博士

学習活動	発問・指示など	紙芝居
<p>1 学校生活の場面を想起し、問題を把握する。</p> <p>(1) 運動会 (2) 生活科の校外学習 【そうか！】</p>	<p>「この紙芝居を見てみましょう。運動会、楽しかったですね。」</p> <p>「この子はげんきくん。元気いっぱいです。かけっただけでなく、玉入れ、そしてリレーでも大活躍。疲れた—なんて一言も言いません。」</p> <p>「この子はへとへとくん。あらら、せっかくのかかけっこののに靴が脱げてしまって転んでしまっていますね。運動会が終わった後は、疲れてぐったりです。」</p> <p>「これは生活科で公園に行きました。みんなもさくら公園に行こうとしているね。」</p> <p>「ここにも、げんきくんとへとへとくんがいます。二人はどうかな？」</p> <p>「げんきくんもへとへとくんも毎日、みんなと同じようにがんばっています。でも、このように元気いっぱいと疲れてへとへとです。どうしてでしょうか。」</p> <p>C「どうしてかな？」</p>	<p>紙芝居</p>  <p>※へとへとくんは靴が脱げてしまっている。</p>  <p>※へとへとくんは靴ずれをおこし、痛がっている。</p>
<p>2 正しい姿勢や歩き方について考える。</p> <p>(1) 立位</p>	<p>「これを見てください。どちらがよい姿勢ですか？」</p> <p>○よい姿勢は、背筋が伸び、両足に体重がしっかり乗っている。</p> <p>●悪い姿勢は、背筋が曲がり、片足に体重が偏って乗っている。</p> <p>C「1番！」</p> <p>「どうして1番ですか？」</p> <p>C「ピンとまっすぐに立っている。」</p> <p>C「2番のほうは、背中が曲がってしまっているよ。」</p>	  <p>※一度、げんきくん、へとへとくんから離れたたい。</p>

<p>(2) 座位</p>	<p>「次は、どうでしょう。どちらがよい姿勢ですか？」  <input type="radio"/>よい姿勢は、背筋が伸び、両足がぴったり床についている。(いわゆるピンピタグー)  <input checked="" type="radio"/>悪い姿勢は、肘をつき、足を組んでいる。  C「2番！」  「2番はピンピタグーだね。」</p>	
<p>(3) 歩容</p>	<p>「次はどうでしょう。どちらがよい姿勢ですか？」  <input type="radio"/>よい歩く姿勢は、かかとからしっかり踏みしめて歩いている。  <input checked="" type="radio"/>悪い姿勢は、小股で足裏全体がついてしまっている。  C「1番！」「なんか、かっこいい。」</p>	
<p>(4) 実際に行い、確かめる</p>	<p>「実際にやってみましょう。まずは、立つ姿勢から。気を付けはどうだったかな？」  「次は、座っている姿勢。ピン、ピタ、グーだね。」  「次は、歩く姿勢。これは今までやっていなかったね。体育の時間にやってるのと同じ、リズムに合わせてかっこよく。」  ※必要に応じてリズム太鼓でリズムをとる。</p>	
<p>3 姿勢や歩き方について大切なことを考える。</p>	<p>「今、3つやりましたが、3つとも、大切なことがあるんです。何かな？」  C「ピンとまっすぐに。」  C「何かな？」  「それは、これです。」(紙芝居7を見せる)  (指さしながら)  「立っている時には、両方の足で立つ。座っている時には、両足を床につける。歩く時には一歩一歩、しっかり地面を踏んでいきます。」</p>	
<p>4 正しい靴の履き方について考える。 【そうだ!】</p>	<p>「実は、へとへとくんもこのことをみんな一生懸命やっているんです。でも疲れてしまいましたね。げんきくんの疲れしない秘密は何でしょうか？」  C「何だろう」  ※状況に応じて、紙芝居1、2にもどって見せる。</p>	
<p>(1) ファスナーのとめ方</p>	<p>「どちらがげんきくんで、どちらがへとへとくんでしょうか？」  <input type="radio"/>ファスナーをとめている。</p>	

(2) かかと

- ファスナーをとめていない。  
C「赤だよ、赤！」

「これは、どちらでしょうか？」  
○かかとをきちんと入れている。  
●かかとをおって履いている。  
C「赤、赤！」

「もうわかりましたね。正しく靴を履くことができれば、姿勢も歩き方もよくなるんです。そして、げんきくんのように元気いっぱいになるんですね。これを見てください。」

- ①脱ぐときにファスナーをゆるめる。(ベリベリ)
- ②かかとを合わせて履く。(トントン)
- ③ファスナーをしっかり締める。(ぎゅう、ピタ)

5 正しい靴の履き方を体験する。

「実際に、靴を履いてみましょう。」  
※机を前によせ、準備していた外靴をはいてみる。

6 正しい姿勢、歩き方、靴の履き方の生活習慣を身に付けることの大切さについて知る。

※外靴をしまい、裸足で、  
「足指ジャンケンをしてみましょう。」  
「足指体操をしてみましょう。」  
「足指つなひきをしてみましょう。」

※上履きを履き、教師の回りに集まる。  
紙芝居でまとめ。  
(紙芝居12)「靴を正しく履くと、今、みんながやったのと同じように、みんなの靴の中で足の指がよく動きます。足が元気になるんですね。」

(紙芝居13)「それから、足が元気になるために大切なことをジェス教授からもう一つ。足をきれいにする事です。さっき、手足の握手をしましたけど、こうやってふだんから、手と同じように足もよくあらいことが大事です。」

(紙芝居14)「靴下もきれいに洗濯します。」



※ジェス教授が説明するように。



(紙芝居15)「上履きもきれいにすることです。一週間の終わりにこれまでと同じように上履きを持ち帰って、きれいに洗濯しましょう。自分でお洗濯の手伝いをしているえらい人はいますか。」

「これが、げんきくんの元気の秘密だったんだね。姿勢だけでなく、靴の履き方も気を付けるとみんなもげんきくんみたいに元気いっぱいの足、体になります。」

(紙芝居17)「へとへとくんも靴をしっかりと履くように気を付けたら、こんなに元気いっぱいになりました。みんなにもげんきくんや、へとへとくんのように元気いっぱいの足になってほしいです。」



## 平成24年度個人賛助会員

### 個人賛助会員(20,000円)

秋田県	大山 裕一郎
-----	--------

### 個人賛助会員(10,000円)

北海道	小松 一保
青森県	丸岡 博
岩手県	伊藤 晃二
	伊藤 張二
宮城県	紺野 利次
	鈴木 淳一
	佐藤 輝子
群馬県	清水 邦夫
埼玉県	井上 馨
	角屋 房男
	廣川 貞夫
千葉県	諸持 耕太郎
東京都	菊井道子
	土屋隆之
	大沼 昇
	杉山 正明
	山田 修司
	小巻 優子
神奈川県	三宅 則良
新潟県	齋藤 英男
	渡辺 耕司
石川県	北本 幸男
	正吉 喜久夫
福井県	宮崎 義幸
	吉田 淳夫

岐阜県	青木 廣志
	後藤 茂伸
静岡県	滝口 兼光
	松田 清孝
山梨県	八野 耕一
	清水 満
	荊沢 貞夫
愛知県	荒木 修
	堀田 知人
	縣 靖治
三重県	鈴木 忠彦
	馬場 一美
大阪府	長原 浩
兵庫県	久保田 幸久
	加藤 浩一
	河野 泰明
奈良県	西浦 正翁
	井岡 陽子
和歌山県	岩本 章
鳥取県	長谷川 郁代
	隅 坂 義之
島根県	玉野 桂子
	宮本 夏子
	井上 和朋
岡山県	武田 肅
広島県	磯部 正義
	寺田 宣文
	阪田 福三

高知県	筒井 清
福岡県	石井 保幸
	柳 昭博
佐賀県	竹下 敬教
長崎県	本多 五稔
	阿比留 和裕
大分県	首藤 賢一
	鈴木 基史
鹿児島県	山上 浩司

## 賛助会員（団体）

[児島株式会社](#)

[日本教育シューズ協議会](#)（足育研究開発共催団体）

[株式会社ギムニク](#)（優良体育用品認定商品販売企業）

教育シューズ振興会

[株式会社学研教育みらい](#)

[学校体育シューズ研究会](#)（（株）アスティコ）・（協和（株））

[株式会社大修館書店](#)

[フットマーク株式会社](#)

[株式会社第一学習社](#)

[日進ゴム株式会社](#)

[株式会社光文書院](#)

[東京書籍株式会社](#)

[大日本図書株式会社](#)

[ブランロッシュ株式会社](#)

〈大会協賛企業〉

[トップツアー株式会社](#)

本財団事業は

[「公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金」](#)よりの助成を受けています。

# 水島宏一の 器械運動アプリ

iPad 対応  
大好評配信中!

☆ 3つのポイント ☆

- 1 ダウンロードは無料!
- 2 厳選された動画コンテンツ!
- 3 簡単便利な、動画撮影・保存機能!

詳細は右の特設ページにて公開中!

☎ <http://www.kobun.co.jp/app/kikaiundo.html>



学ぶことが好きになる。

光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町 14  
TEL 03-3262-3271 / FAX 03-3230-4190  
URL <http://www.kobun.co.jp/>

新しい体育の授業づくりに取り組む先生、保健体育教師を目指す学生におすすめ!

# 新しい 体育 の授業づくり

編著者

勝亦紘一 (中京大学名誉教授)

家田重晴 (中京大学教授)

- 体育の授業や運動部の活動を通して、生徒たちが楽しく生涯にわたるスポーツライフの基礎を築くための、指導者の道標。
- 保健体育科教育を熟知している著者が、21世紀の新しい体育への授業づくりへの挑戦。

B5判 208頁 定価 (本体 2,000円 + 税)

大日本図書

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-11-6 ☎ 03-5940-8679 FAX.03-5940-8688  
大日本図書ホームページ: <http://www.dainippon-tosho.co.jp>

# NHK DVD教材 地震防災 DVD

学校における防災教育に最適です!

大きな地震が起こったときや緊急地震速報が流れたときに、どのような避難行動をとればよいか。地震・津波に対する防災・避難行動を、東日本大震災をふまえて、NHKの資料映像およびケーススタディを中心にわかりやすく解説します。

● 監修 (順不同・敬称略)  
渡邊正樹 / 戸田芳雄 / 矢崎良明 / 川邊重彦

発行: **NHKインタープライズ**  
販売: 東京書籍 ©2012 NHK ENTERPRISES

地震と津波から命を守る (小学校向け) 全1巻  
大地震と津波に備える (中学・高校向け) 全1巻

各約20分 指導の手引き付き  
価格: 各18,900円 (税込)



東京書籍

ICT事業本部 営業部 (東京) 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1  
(大阪) 〒532-0004 大阪市淀川区西宮原 1-4-10  
東京支社 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1  
ホームページ <http://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット <http://ten.tokyo-shoseki.co.jp>

Tel: 03-5390-7577 Fax: 03-5390-7582  
Tel: 06-6397-1351 Fax: 06-6397-1357  
Tel: 03-5390-7467 Fax: 03-5390-6017

# 【新体カテスト集計・分析システム】

(文科省発表新体カテスト準拠)

以下の資料をお届けします

体力づくりをめざして

- 個人カードはカット済
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全バックアップ

- 学校総括表
- 順位一覧表・級門分布表
- 判定別一覧表
- 生徒指導カード(個人カード控)
- クラス台帳
- 生徒指導台帳
- 部活分析表
- 運動部活別比較表
- 部活台帳
- 学校集計資料・保健部資料
- ★教育委員会提出資料を完備

集計・分析処理料金(1人分)

220円(税込)



**第一学習社**

TEL082-234-6800 FAX082-503-3084 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14

●大阪支社/☎06-6380-1391

●札幌営業所/☎011-811-1848

●仙台営業所/☎022-271-5313

●新潟営業所/☎025-290-6077

●つくば営業所/☎029-853-1080

●東京営業所/☎03-5803-2131

●横浜営業所/☎045-953-6191

●名古屋営業所/☎052-769-1339

●神戸営業所/☎078-937-0255

●福岡営業所/☎092-771-1651

●金沢出張所/☎076-291-5775

●沖縄出張所/☎098-896-0085

成長期の正しい足の発育促進に大きな効果を  
発揮する画期的な21世紀のシューズ。

教育シューズ  
フレッシュ21

教育バレー®DX

推薦

(財)日本学校体育研究連合会  
全国小学校体育研究連盟



4つの優しさ

- 優しさ 1 つま先ゆったり!  
外反母趾予防設計
- 優しさ 2 洗たくカンタン!  
はずせる中敷
- 優しさ 3 着地らくらく!  
衝撃吸収材
- 優しさ 4 足にピッタリ!  
0.5cmきざみ

財団法人 日本学校体育研究連合会特別賛助会員

**日進ゴム株式会社**

〒700-0975 岡山市北区今8丁目16番17号

TEL (086)243-2456 FAX (086)242-0550

<http://www.nisshinrubber.com/>

教育シューズ 教育バレー は、日進ゴム(株)の登録商標です。

スクールシューズのプレミアムスタンダード

# 教育シューズ® PK-X3



極める

グリップ性

耐久性

超軽量

サイズ…21.0cm~28.0cm 29.0cm 30.0cm 31.0cm アッパー…ポリエステル/人工合成皮  
ソール…合成ゴム/合成樹脂

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

**教育シューズ振興会**

TEL(086)243-2218 FAX(086)243-2253

(製造部)日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467

<http://www.nisshinrubber.co.jp>

e-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp

# クロールで25m泳ぐ近道。

浮いて泳げる水着キット

## クロールで25

クロールで泳げるようになりたい！  
「クロールで25」はそんなお子様をサポートする水泳キットです。

感動体験ムービー放映中！  
詳しい情報はホームページへ。

<http://crawlde25.jp/>



検索 クロールで25

品名：クロールで25  
品番：132129  
サイズ：120～160cm  
カラー：紺色のみ・男女兼用  
仕様：オールインワン型水着  
浮力シート8枚セット  
価格：4,725円（税込み）



泳げる近道  
1  
着るだけで  
水平に浮く

体を4点の浮力で吊り上げ、水平姿勢（ストリームライン）をつくる水着です。



呼吸するときも  
上半身が沈まない  
ようサポート

← 浮心 →  
水平に浮く

沈みやすい下半身を  
浮かせて泳ぎやすい  
姿勢をつくります

泳げる近道  
2  
浮力が調節  
できる

習得段階に合わせ浮力の調節ができます。  
最後は浮力シートなしで泳げるよう補助。

前に  
着替える  
のが簡単！



水着の内側にあるポケットへ浮力シートを入れます。（左右に装着）



上達したら薄いシートへ交換

# すまいるスイムシリーズ

【超はっ水で速乾・軽量】

速乾

軽量

超はっ水

超はっ水だからできる速乾・軽量！

着用者の90%以上が軽さを実感（当社比）。



水にぬれても、肌にはりつかずさらとした軽い着心地  
超はっ水だから…「着替えがラクラク!!」

\*使用後の持ち運びもラクラク！ \*通常の水着より速く乾きます！

安全・安心!!「赤外線盗撮」から子供達を守ります。

「生地が柔らかく脱ぎやすい!」



●水を弾き軽い!体が浮く感じ!

●はっ水効果は3年以上持続!



赤外線盗撮防止素材を採用!安心・安全な水泳授業を応援!  
フットマークだけのオリジナル新素材!

技術企画・開発(協賛特許) 朝倉染布 株式会社 / 山田化学工業 株式会社

フットマークの新素材は、赤外線を吸収する染料加工を施すことで  
悪質な赤外線盗撮を予防し、赤外線盗撮から子供達を守ります!

[www.footmark.co.jp](http://www.footmark.co.jp)

※右記までご連絡下さい。資料等をお送り致します。

フットマーク株式会社 スクール開発販売部  
東京都墨田区緑2-7-12 TEL:03-3634-0506

FOOTMARK®

新しい体育の授業づくりで、  
最高の成果をあげるために!!

「具体的に授業に役立つ」ことを主眼において、子どもたちの楽しく意欲的な学習活動を引き出す授業づくりのノウハウを新界の研究者・実践家がわかりやすく解説します!!  
イラスト多数!  
すぐに使える学習カード付き!!

《新学習指導要領準拠》

## 新しいマット運動の 授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐、大貫耕一〔編著〕

【主要目次】段階的な技術指導の方法／マット運動の授業展開例／すぐに使える学習カード／〔コラム：マット運動の歴史〕

●120頁 定価＝本体 1,143 円＋税



《新学習指導要領準拠》

## 新しい跳び箱運動の 授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐〔編著〕

【主要目次】段階的な技術指導の方法／跳び箱運動の授業展開例／すぐに使える学習カード／〔コラム：跳び箱運動の歴史〕

●104頁 定価＝本体 1,143 円＋税



《新学習指導要領準拠》

## 新しい鉄棒運動の 授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐〔編著〕

【主要目次】段階的な技術指導の方法／鉄棒運動の授業展開例／すぐに使える学習カード／〔コラム：鉄棒運動の歴史〕

●120頁 定価＝本体 1,143 円＋税



《新学習指導要領準拠》

## 新しい体づくり運動の 授業づくり

高橋健夫、小澤治夫、松本格之祐、長谷川聖修〔編著〕

【主要目次】動きや体力要素に着目した運動例／授業づくりに生かせる学習プログラム／体づくり運動の授業実践例／授業で使える学習カード ●168頁 定価＝本体 1,429 円＋税



《新学習指導要領準拠》

## 新しいボールゲームの 授業づくり

高橋健夫、立木正、岡出美則、鈴木聡〔編著〕

【主要目次】ゲーム（ボールゲーム・鬼遊び）／ゴール型ゲーム／ネット型ゲーム／ベースボール型ゲーム／授業に役立つ資料

●168頁 定価＝本体 1,524 円＋税



# Gakushin®

SCHOOL SHOES  
**S-2800**



**SPES** スペース  
学校体育シューズ研究会  
School Physical Education Shoes

**School Shoes** としての耐久性  
ただ長持ちさせるのではなく、  
運動性能と安全性能も大切です。

**協和株式会社** 神戸市長田区西尻池町1丁目3番8号  
TEL : 078-611-4376(代)

**GOLDSTAR**  
SPORTS SCHOOL SHOES

**GX**



体育館  
シューズ

**SPES** スペース  
学校体育シューズ研究会  
School Physical Education Shoes

高機能・ジャストフィットを実現  
超軽量モデル 片足 (24.5cm) 290g

**ASTICO** 岡山県岡山市中区江並417-1  
株式会社 アスティコ TEL : 086-276-2010(代)

ココロ花咲く、ステキな旅を。

お客様満足度100%+ $\alpha$ を追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。

55年の実績と豊富な情報力を駆使して

高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。

私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する

【旅行インテリジェンス企業】です。

出逢い、発見、そして感動。

**トップツアー株式会社**

観光庁長官登録旅行業第38号 © JATA正会員・ボンド保証会員

〒153-8550 目黒区東山3丁目8番1号

<http://www.toptour.co.jp>

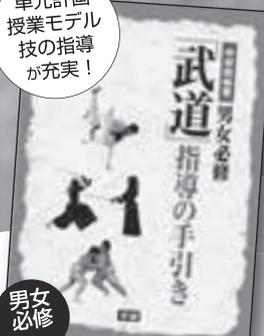
**TOPTOUR**



10450055(04)

# 豊かな スポーツライフの ために

単元計画  
授業モデル  
技の指導  
が充実!



男女  
必修

「武道」指導の手引き

授業で使える  
音楽CD付き!



DVD  
+  
CD

ダンスの基本

表紙が新しく  
なりました!

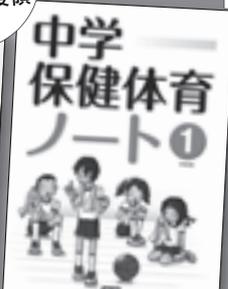


中学体育実技

平成25年度  
改訂新版!  
学習指導要領  
対応



中学保健体育の  
学習 1~3年



中学保健体育  
ノート 1~3年

保健体育副読本



最新のルール  
が1冊に!

図解  
スポーツルール



生活健康度の  
判定もできる!

学研式 体力テスト

(公財)日本中学校体育連盟 特別賛助会員

**(株)学研教育みらい**

学校教育事業部 TEL 03-6431-1151(代表)  
〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

学研 学校教育ネット

検索

<http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>



特定非営利活動法人

# 日本 G ボール協会

お陰様で設立 10 周年を迎えました



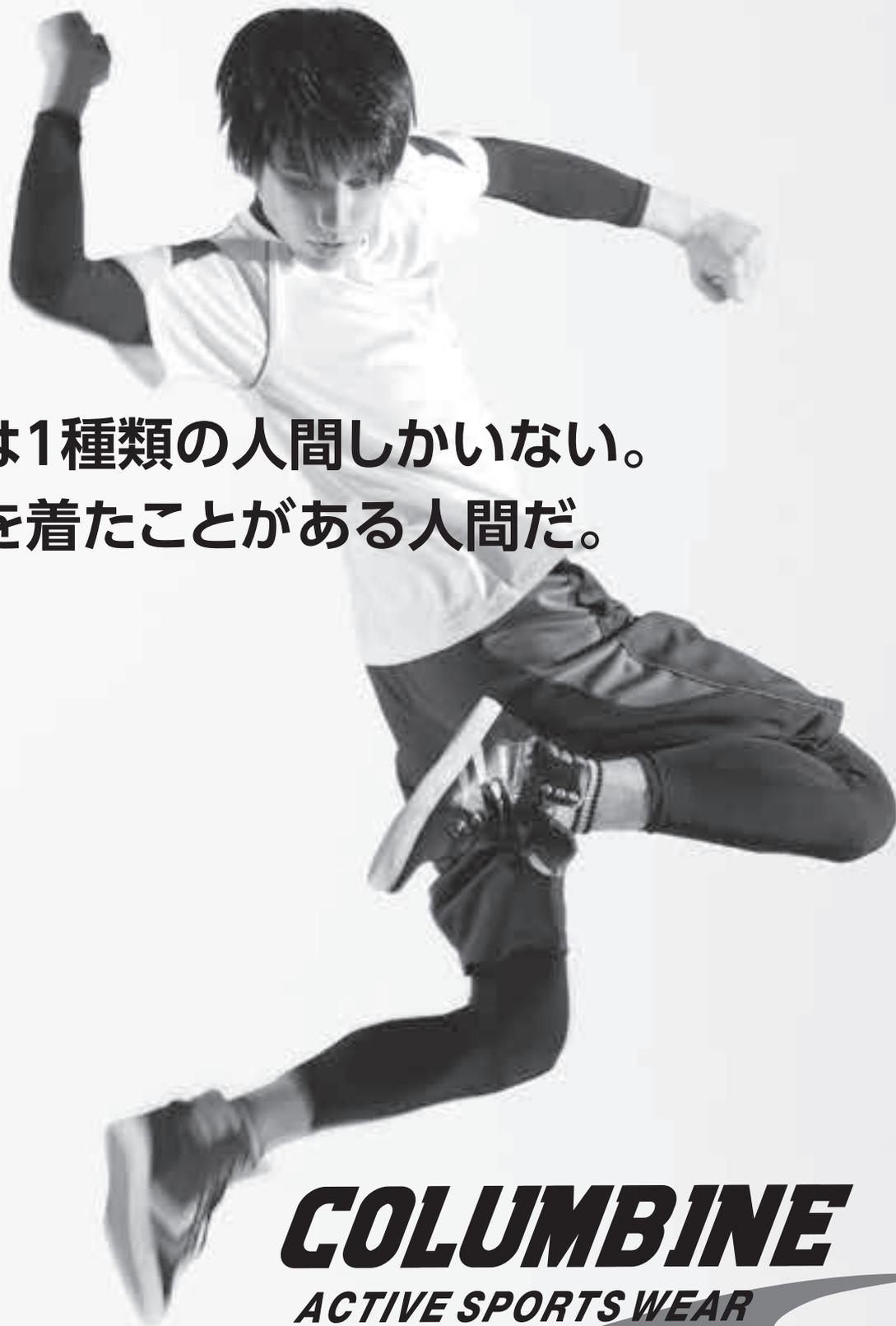
<主な事業>

- 学校体育、健康づくり、コンディショニング、トレーニングなどといった目的・対象別のGボール活用プログラム及び指導法の開発と普及
- 総合的なGボールに関する知識を持った上で、対象者に合わせた指導のできるインストラクターの養成
- 子どもから大人まで、誰もが楽しめるスポーツGボールの普及奨励



特定非営利活動法人  
日本Gボール協会  
[www.g-ball.jp](http://www.g-ball.jp)





日本には1種類の間人しかいない。  
体操服を着たことがある人間だ。

***COLUMBINE***  
***ACTIVE SPORTS WEAR***

## 児島株式会社

本社/〒711-0911 岡山県倉敷市児島小川2-4-60  
TEL 086-473-4634 FAX 086-472-0866  
URL: <http://www.netlaputa.ne.jp/~kojima>  
e-mail: [gyomu4@kojima-gp.co.jp](mailto:gyomu4@kojima-gp.co.jp)

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員  
(公財)日本学校体育研究連合会推薦品



JQA-EM 5215  
ISO 14001:2004  
児島株式会社、コロパイン株式会社



JQA-QM7340  
ISO 9001:2008  
児島株式会社、コロパイン株式会社、株式会社

つねによりよい学校体育の  
環境づくりを提案しています。